文學士　八杉貞利述

外國語教授法　全

東京　寶永館發行

東京帝國大學圖書之印

807Y592g

帝国図書館蔵書

国立国会
29.7.22
図書館

337130

はしがき

今日の日本の有様からいふと、外國語教授法の講究くらゐ、必要であって、しかも等閑に附せられて居るものは多くありますまい。内は、國民に歐米諸國語や東洋語を學ばせたり、北海道や臺灣の土人に國語を教へたりするばかりでなく、外は清韓兩國民に日本語を授けて彼等を啓發すると共に、我國語の勢力範圍を擴張する抱負をも有する所の我邦人が、現に修め、又は教へて居る外國語學がいかなる効果を得つつあるかを見ると、實に慨歎のたねばかりであります。これは、つまり學び方と、教へ様とが備はらぬからのことでありますから、何か適當の方案を紹介したいと、かねてより願って居りました所が、幸にも言語教授法の木鐸と仰がれるスヰート氏の新著「實用語學」(Practical Study of Languages)に接

し、このがはで幾分か今迄の缺點の補ひにもなりませうかと思って、同書の大綱に基き、多少自分の考へを交へて、このやうなものを綴ってみました。さて之を一書にまとめて出版するについては、訂正增補するつもりで居りましたが、圖らず今度急に西遊の途に上ることとなりましたので、遺憾ながら字句の修正だけにとどめて、その儘、書肆の手にわたすこととしたのであります。それゆゑ隨分足らぬ所がありませうが、それは再版する機でもあったら、その時に補ふことと致しませう。

なほ、本書の讀者は、言語學や發音學の書物を參考されることが必要であります。又國語教授法に關する著書をも合はせて一讀されたならば、裨益する所が多からうと思ひます。

明治三十四年十月下旬　譯述者しるす

外國語教授法目次

第一章　緒論……一
實用的及理論的教授……一
一般原理の必要……二
書法の善惡……三
第二章　聲音の論……三
聲音論は今始まったので無いこと……四
摸倣にのみよつたあやまり……五
こまかい分別を蔑にしたあやまり……五
有機的及音響的方法……六

音の及發音法の分解……六
近きにより遠きを導くこと……七
國音と外國音との關係……八
第三章　音の記載(寫音的文字)……八
音の通りに綴ることの効用……九
非音的の綴り……一〇
歴史的の綴りと音的の綴りとの關係……一二
つけ加への文字及び記號……一四
寫音文字の原理……一五
自國のみを根基とするか世界を根基とする
かのこと……一七

不必要な分別……一七
修飾の自由に出來る普遍の根基……一八
羅馬字をもとにしない有機的文字……一九
今日最多く用ゐられる寫音的文字……一九
第四章　外國文字に就て……二〇
第五章　聲音法の標準……二二
第六章　聲音學大意の學習……二四
第七章　談話語から始めること……二六
第八章　語學上に存する困難……二七
外的の困難……二八
自國語との關係……二八

內的の關係四ヶ條ほど……二九
聲音學習の困難……三二
困難は果して其語の活用組織の複雜に存すべきか否かの論……三三
眞正の困難は語彙の習得に存す……三五
すべて國語は同一に困難なり……三五

第九章　教授法の一般……三六

言語慣習の種々あること……三七
「アーン」「オルレンドルフ」一派の誤見……三八
文典及び辭典と其必要……三八
所謂自然方法と其誤見……三八

「グアン」の方法……三九
其國に行て其語を學ぶことの考へ……四〇
個人及び國民が言語習得の巧拙……四二
語學に一般原則の存在すべきこと……四三
歴史的及比較的言語學……四三

第十章　教授法の特殊原則……四六

文法的法則を教授する上の考へ……四六
個々の場合に就ての學習……四八
觀念連合の法則……五三
言語教授に連想の原則を用ゐる上の六個の主義……五四

記憶を保つ方法……六一
反覆……六二
興味……六三
讀本、文典及辭典の關係……六五
言語教授における五個の時期……六七
第十一章　文典(語典)……七二
語詞論と措辭論との區分……七二
形式的及論理的措辭法……七三
語詞論と措辭論とを同時に教授する方法……七五
文法上の引例に就て……七六
語尾變化の表……八〇

第十二章　辭典(字書、語彙の習得)……八二
辭典の內容及文典との關係……八三
辭典の範圍に關する三ケの注意……八四
辭典編纂に關する外の側の注意……八六
內の側の注意……九一
辭典の二種類……九二
第十三章　用書、讀本……九三
讀み物の分類法二種……九四
讀本編纂に關する注意……九六
一、連絡……九六
二、讀片の長短……九七

三、前後關係の明瞭……九七
四、語彙の制限及撰擇……九八
五、內容の親近……九九
六、言語の簡約……九九
七、變化を貴ぶこと……九九
第十四章　國語間の關係—飜譯……一〇〇
自國語を土臺とすること……一〇一
交換聯想……一〇三
繪畫法……一〇四
飜譯の必要……一〇五
飜譯の階段……一〇七

國文外譯……一〇八
實體教授……一〇九
第十五章　會話……一一〇
會話の効益及困難……一一〇
現用の會話書及句集……一一一
第十六章　文學……一一二

外國語教授法目次

をわり

外國語教授法

文學士　八杉貞利述

第一章　緒論

實用的及理論的教授—一般原理（ジエネラルプリンシプル）の必要—書法の善惡

實用的及理論的教授

言語を話し、聽き、讀み、書くための實用教授の側と、その歷史や語源を論ずる理論的の側とを區別するのは、甚だ必要のことであるが、しかし、それに伴うて、また言語の實用的學習又は教授が、理論的のものに比べて、決して非科學的のものでは無いといふことを明にせねばならぬ。言語の實用的教授の科學的基礎は、いはゆるいきた言語の上の言語學ともいふべきものであらう。さう

一般原理の必要

すれば、實用教授の上にも、一般の原理や主義といふやうなものを定めるのが、甚だ必要なことは明らかで、この一般原理が定まつて後に、これをいろ〳〵に結合して、それ〴〵特別の場合に適用するやうにするので、即ち英なり獨なり佛なり、各別國語の教授學習法は成り立つのである。われ〳〵は今茲には專らこの一般原理の考究に從事しやうとするので、各個特別の國語の場合には、餘りかゝはらない考へをもつ。尤もこゝには、「何故語學が必要だ」とか「心の練習上、語學がどんなつとめをするか」「獨逸語や數學よりは希臘語の方が、心の教育上、餘程効能がある」などといふ問題にはかゝはらないで、語學はやるべきものとして、論法をすゝめやうとする。

その論旨は、たゞわれ〳〵の説を述べる計りでなく、舊來の方法に對し、多少批判的の場合もあらう。かの「オルレンドルフ」や、

書法の善惡

「アーン」や、さては「プレンデルガスト」や、「ジアン」などのやうな方法は、何れも自分の約束した處を履行し得なかつたゝめに、相次で世の捨るところとなりつゝあるが、しかし「オルレンドルフ」などは、まだ今日でも、多少の崇拜者があり、つまり教授の現在は、方法の上でも、教科書の上でも、生存競走をして、優勝劣敗の時代であり、しかもかゝる運命は、われ〳〵の最悅で受けんとする處である。凡そ善良な方法は、まづ包括的で撰りぬきのものでなくてはならず、それはまた、近世の言語學の完全な智識即ち聲音學や、聲音の記載法や、文法的構成及一般に言語上の理論の上にくみたてられ、而してその智識は、常に記憶と聯想との法則をとく心理學の原理によつて、導かれねばならぬことである。

第二章　聲音の論

聲音論は今始まつたのでないこと

聲音論は今始まつたのでないこと—摸倣にのみよつたあやまり—こまかい分別を蔑にしたあやまり—有機的及音響的方法—音の及發音法の分解—近きにより遠きを導くこと—國音と外國音との關係

聲音學が言語の學問に於ける關係は、恰も數學が天文學や自然科學に於けるやうなもので、第一に必要なものである。尤もこの必要は、今日始めて知られたことでは無くて、母音、子音、硬い音、軟かい音などは、皆聲音分解の結果で、むかし希臘の「アレキサンドリア」の語學者は、單に聲音學者であつたばかりでなく、立派な綴字改良論者であり、羅馬人も之をうけつぐし、又た東洋では梵語學者が、にらい聲音學者であつた。たゞ從來の聲音論は二樣の

摸倣にのみよつたあやまり

こまかい分別なる蔑にしたあやまり

誤解のために十分の効果をえなかつたのである。

第一のあやまりは、聲音はたゞ摸倣さへすれば、覺えられると思つたことである。これは丁度道場の前に立てさへ居れば自然と劍術が覺えられるといふのと同じことで、甚だむづかしいことである。小兒が自國語の音をおぼえるのも、甚だ長い時日を要し、又た立派な言語學者が、自由に書いたり、よんだりする國語の音を、いつまで摸倣しても、十分に習ひえないことがある。

第二のあやまりは、音のこまかい區別が輕視されたことで、例へば佛蘭西語などでは、同一の母音eにも、開いたのと閉ぢたのとがあつて、「ペーシェー」の如き語は、その母音eの開いたのと閉ぢたのとによつて意味が異るやうになる。かやうな細かい點は、從來の外國語教授では、常に輕視された。英國人は、單數と複數との「メン」「人」頭と持つ」との「ヘッド」などの母音の、それ〴〵異ること

を明らかに聞きわけるが、外國人は屢之を混同し、獨逸人などには頭も持つも帽子もみな同樣に「ヘット」の發音をする人が多い。併し外國人にはわからぬやうな極めて些細な音のちがひが其國では、極めて大きな意義の相違を生ずることを考へると、完全な教授法では、この點を蔑視してはならぬ。

有機的及音響的方法

聲音學には二樣のつとめがあり、其一は、一音の出るためにはたらく口や咽喉や鼻など及びその中にある聲帶や齒や舌や上下顎などの形狀位置などを記載することで、之をその有機的側面といひ、又他の一は之を音響的側面といひ、音の耳に對する側の感覺やその物理的性質をしらべる。この兩側面が相待て、まことの聲音論は出來上るわけである。

音の及び發音法の分解

さて考究の第一點は、各の音を他の音からはなしわけ、その音を他のいかなる音と、いかなる狀態に於て結合さしても、變化無しに發音しうることで、第二點は、知つて居る音の出方を分解するのを習ふことである。例へばf音を出す時には、毫も喉頭にある聲帶の振動は無いが、舌も唇も口の形も全くfと同一で出るv音の時には聲帶の振動が伴ひ、手を咽喉部にあてるか、又は手で兩耳をふさぐと、明かに其振動を感ずることが出來るといふことを知るまでは、この兩音の上に、いくら理論的說明をしても、何にもならぬたぐひである。

近きにより遠きを導くこと

近きから遠きに及び、知たるものによつて知らぬものを考へるのは、自然の道理である。すべて言語には、その發音の基底といふものがあつて、舌なり唇なり、平常時の口內の形態が、すべて色々な音の出るもとになつて居るので、この基底は、各國の語によつて、それ〴〵性質を異にする。基底の異ることは、同一の音種をも、異つて聞えさするもとになるので、全一の發音法で出る音が、國々のことばによつて、異て聞えるのは、これがためであ

國音と外國音との關係

る。故にまづ自國語の音の基底が、果してどういふものかを明かにし、之と外國音の基底とを比較して、知ることが最肝要である。英國のわかい二人の紳士が佛國にいつて「ボークー」(澤山)のやうな平常なことばが、わからなかつた例しもあり、かた〳〵聲音論は、十分に考究しなければならぬ。

第三章　音の記載(寫音的文字)

音の通りに綴ることの効用—非關的の綴り—歴史的の綴りと音的の綴りとの關係—つけ加への文字及び記號—寫音文字の原理—自國のみを根基とするか世界を根基とするかのこと—不必要な分別—修飾の

音の通りに綴ることの効用

自由に出來る普遍の根基—羅馬字をもとにしない有機的文字—今日最多く用ゐられる寫音的文字

音の分解に次で最必要なのは、音の通りに文字を綴て、人を敎へ、又た學生の習ふ用に供することである。音通りに綴た文字によつて語學をする學生は、一般の法則を十分に理解した後は、いかなる文書に出遇つても、正確に讀むことが出來、たゞて發音上のいろ〳〵な面倒な規則を以て、記憶を苦しめるに及ばぬことになる。例へばかの佛蘭西語の、開いたeと閉ぢたeとの區別などは、此音を寫す文字を用ゐることによつて、困難なく學生に習はしめることが出來る。歴史的な音と文字と一致しない諸國の現在の綴り方によつて居ては、學生は語學の當初から、誤つた母音や子音の發音に安んせねばならぬ。音の通りの綴り、音を正しく示した

文字を用ゐるなは進んだ利益は、學生は當初から、その語を現在實際に話されて居る通りのかたちで習ひ覺えるために、其音を實際耳にきいた時分に、早く理解しうる便利がある。自由に佛文を書き、又は讀みうる英國の紳士でも、始めて佛蘭西の土地を踏んだ時には、その國人のいふことは、何が何やら、一向わからぬといふことである。かやうな弊害は、始めから音的文字に依て、正しい發音を習はしめて防ぐことが出來る。蓋單に耳ばかりに依て、外國音の習得をしやうとすることは、既に摸倣といふことを餘り重くみすぎた從來の謬見の條にのべた通り、到底出來難いことであるので、隨分發達した語學者でもそうである。まして一般の學習者に於ては、この音通りの文字や綴りによつて、正しい發音の考へをつるより外に、よい方法は無いのである。

非音的の綴り

英吉利や佛蘭西のやうな、音と文字とまるで別な歴史的な綴りを用ゐる國語を、其文字によつて習ひ覺にやうとするのが、いかに困難なことであるかは、今又た多く說くを要せぬであらう。(我國などでも、高等な文學を讀み、之を理解する英語の學生が、いかにおかしな、いかにあやしげな發音をして居るかを見ると、此點は直ちに明かになる)、これは、音通りの文字を用ゐるに依て防ぐことを得る。殊に普通の文字では、音調の高低强弱など、即ち一般に「アクセント」や「ストレッス」を附け無いが、之は是非、音文字を用ゐ、之に記し加へて、敎へねばならぬ。獨逸人などでも始めて英吉利へ參た時には、語調の異るために同一の事を言て居ながら、大なる誤解を生ずることは、常だといふことで。殊に露西亞語のやうな「ウダレーニェー」のやかましい複雜な國では、この點の必要は非常である。獨逸語の語調は、比較的規則立つて、たやすいが、それでもなは、例へば「ユーベルセッツェン」の一語が、調子の

場所に由て、意味を異にするなどは、初學者には多少迷ひ易いであらう。

さてかやうな音通りの文字や綴りを、語學に用ゐるに對して、第一にあらはれた故障は、勿論、之と本來の歴史的の綴りとの關係であつた。即ちわれ〳〵の考に反對の論者は、なるほど始めに音文字を用ゐるのはよからうけれど、これから今日實用の文字遣ひに移る場合に、甚だしい困難が起りはせぬか。一旦音的文字で深く敎へこまれた學生は、一生眞正の綴りが出來ずに仕舞ひ、常につゞりを誤るやうになりはせぬか、といふことで、これが大分強い攻擊であつた。しかしながら、今日迄音的文字を敎授に用ゐたすべての學者たちの經驗によると、この點の畏れは、全く杞憂に過ぎぬことで、一旦音文字で眞正の發音が十分に會得された後には、普通の文字綴りに移り習ふことは、決して困難な事ではな

歴史的の綴りと音的の綴りとの關係

いことが證明せられて居る。それは英吉利なり佛蘭西なりの綴字改良が實行されて、一般にわれ〳〵の理想通りの文字を用ゐることとなれば、それにこしたことは無いけれど、今日のやうな狀態では、それは思ひ及ばぬことであるから、なるべく敎授上に、勢力少くして効果の多い方法を取ることが必要で、これには音との連想の最密接な寫音文字によつて始めるのが必要だ。即ち易より難に入る敎育上の原則に從つたものである。但し音的のものと歴史的な非音的なものとを、同時に用ゐて敎へることは、これは勿論さくべきわざで、まづ單に音文字を用ゐて、十分に發音の練習をし終つた後には、全然之をすてゝ、單に普通の文字法に移て行かねばならぬ。かやうにせぬと、「クロッス、アッシェーション」の弊害に陷るであらう。

從來の非音的な文字の弊害は、到るところに認めうるが、その

つけ加への文字及び記號

中で、語調のしるしが無いことなどは、寧ろ受働的な欠點で、いろ〳〵な符號を用ゐることによつて、容易く補へる。又た以太利語のやうな、多少音通りの綴りをする國語にあつては、之にいくらかの修飾改善を加へると、從來の儘で、音通りに用ゐることが出來る。例へば線の方向で、上つたり下つたりする語調を分ち、又は草書躰を用ゐて、母音の開いたのと閉ぢたのとを區別する類である。しかし英吉利や佛蘭西のやうな、甚だしい非音的な綴りの國では、かやうな修飾改善も、つまりは其文字法を根底から覆へすことになつて、却て面倒であるから、寧ろ初めから、異つた文字法によつた方がよろしい。音を正しく寫す上に普通の羅馬字の欠點は、次のやうな種々の方法で補ふことが出來る。

1. 新らしい文字を用ゐること。—全く新らしい字か、若くは他の種の文字をかりて、摩擦的口蓋音の「シュ」、及之に對する濁音や、英吉利の「th」の音やなどは、新らしい文字を用ゐる。

寫音文字の原理

2. 記號を附け加へること。例へば母音の上に横線を引て、長母音を示したり、曲線で鼻的音を示したり、斜めの直線で語調を示したりなどする類。

3. 餘計な羅馬字を利用すること。cに口蓋化した喉音の價を與へたり、xに喉的密閉音の價を與へたりする類。

4. 草書躰や大文字に、特種の音價を與へて用ゐること。

5. 二文字を連ねて一音を示すこと。th dh shの如きもの。

新らしい文字や記號を作ることは、之を作る根據をうることが、甚だむづかしい。（印刷上の都合で近世の聲音學者が一致して用ゐる寫音的文字をこゝに示すことの出來ないのは遺憾である。）

寫音文字の好良なものを發見する上の原理は、四ヶほどの點か

ら觀ねばならぬ。

A. 簡明なこと。讀むことの容易なるために、文字は出來るだけ明瞭であるを要すると共に、なるべく簡單の字形でなくてはならぬ。羅馬字が獨逸文字に勝り、又た小さな似寄つた點や線を忌むのは、此點の考へに屬する。

B. 緻密なこと。文字が無益にひろがらずに、多く一處の點に纏まるとは、よむ上に便利である。梵字のやうに、「スクラ」の音が一角内の文字で示されるなどは、横に長い羅馬字をよむより、美しく快い。

C. 結合のこと。書くことの早く且つ容易くあるためには、文字と文字とのつゞき合ひが、自由でなくてはいけぬ。此點に羅馬字と希臘字とを比較して見ると、優劣が一目でわかる。sの上に三角の記號をつけて、摩擦的口蓋音の「シュ」を示すことの不便は、

自國のみを根基とするか世界を根基とするかのこと

不必要な分別

之を書くには、sの次にeを四個續けて書くと、同一の時間を要することで知れる。

D. 印刷のこと。印刷上では、文字の複雜と否とは餘り關係が無いので、たゞ字形の成るべく少ないのが必要である。

さて音文字を定める基礎を自國語の綴り法や發音法の上にとる傾きは從來各國にあつて、實際にも試みられ、英吉利語の上ではエリス」の「イングリッシュグロシック」佛獨は「ソームス」の「イントロダクショ」に用ゐられて居るが、しかしこれは、その根底たる國々の綴り法の異るによつて、各別になり、不便でもあり、不道理でもある。最も良き方法は近來の羅馬字の發音法をもとゝした所謂世界的の根基を用ゐる事で、これによれば、例へば英の「ブック」も佛の「ヲユア」も獨の「グート」も、全樣にuの一母音によつて示されることゝなる。又た實用の上では、文字の必要な分別と、不必要な分別とを

修飾の自由に出來る發音の根基

區別して、無用なこまかい區別はすて去るがよろしい。例へば佛蘭西の開いたeと閉ぢたeとの區別などは、是非示さねばならぬが英吉利の「ハウ」と「ハイ」との重母音（ダブリング）の始めのaの性質の區分などは、文字上に分つ必要は無い。又た語調なども、一定の規則があつて、すべて語の第一綴に語調が來るやうな國語では、特に之を書き加へる必要は無いのである。

さてかやうにして文字及言語の一般原理の上に成り立つ寫音的文字の組織を成立せしめ、さて之に、之を適用する各國語に應じての修飾を加へて教授の用に供する。スヰートの「プライマー」にのべた「ナロー、ローミック」は、多少「エリス」の根底に本づいた科學的の文字であるが、同じ著者の「ハンドブック」に記載したのは、即「ブロード、ローミック」で之が一般の用をえ、この基礎の上に佛蘭西の「バッシー」氏の「アッソシアシオン、ホネチック、アンテルナシオナール」の機關たる「ル、メ

羅馬字をもとにしない有機的文字

今日最多く用ゐられる寫音的文字

ートル、ホネチック」の文字は成り立ち、今日では大多數の學者の採用をえたことである。

羅馬字を根基としないで、寫音的文字を作らうとした學者も少くなく、所謂有機的文字といつて、發音の有機的要素の側に、單位をとつて作つた文字では、早くは「ブリュッケ」の「ホチナッシェ、トランスクリプチオン」（井エンナ、一八六三）にあらはれ、次で有名な「ベル」の「ヴィジブル、スピーチ」（一八六八、一八八二）に用ゐられ、なほその詳しい記載は、スヰートの「プライマー」にある。又たかの「コッペンハーゲン」の「イエスペルセン」によつて、その「アーチキュレーションス、オフ、スピーチ、サウンヅ」（一八八九）の上に試みられた所謂「アナルハベチック」といふ組織もある。之は一字一音を示さず、各の單音は、化學式のやうな幾個かの文字の結合で示すのであつた。然しこれらの文字法は、何れも一般の採用をうることが出來ず、最後にはや

はり羅馬字を基礎とした、「スヰート」や「パッシー」のものが勝利をえたことである。（この點に於ける速記法のことなどの論もあり、又た他の文字法の詳しい批評もあるが、すべて省畧しやうと思ふ。）

第四章　外國文字に就て

外國語學習の第一着の困難は、その文字を習ふことである。英人などに對しては、すべての羅馬字國は、この點に何等の困難を與へぬわけであるが、未だ羅馬字制度も空中の樓閣たる我國では何れの國語を學ぶ上にも第一に羅馬字の難關がある。獨逸文字は、羅馬字國の英國人にもちよつと、入り難いといふことであり、まして我國人などにはかなりの困難を供する。東洋語學が漸次隆盛になつて、露西亞語などの學習が進でくれば、また新らしい困難に出遇はねばならぬ。梵字、亞剌比亞字、波斯字、希臘字などは特別の語學者の外は必要が無いとしても、朝鮮文字、土耳古文字などは學ばねばならぬ。加之一方に漢字制限若くは國字改善等の運動が其歩を進めて、漢字が普通教育を終つた人の頭を支配せぬやうになると東洋國民として是非學ばねばならぬ支那語習得のために、こゝに漢字といふ難關が出來る。

こゝで諸國語のいろ〳〵の文字體を、羅馬字なり、何なり、同一の文字體に書き直はす「トランスリテレート」といふことの必要が生じて來る。近來歐洲諸國の傾向は、漸次其の國特有の文字をすてゝ、羅馬字に一致しやうとするにあつて、殊に亞剌比亞語、梵語、波斯語、土耳古語など東洋語の記載には、羅馬字にかき直すのを常とするやうになつた。此側では極めて保守主義な獨逸でも國民文學の外は、すべての科學技術等萬般の書に羅馬字を用ゐる傾向を取つたことは、人の知る處である。然かし元來の羅馬字國

とは全く種類の異つた言語の國の文字を、これに書きかへやうとするには、多少の困難の附隨するのは勿論で、我國のやうな綴音の簡單な國でも、羅馬字制度を採用せんとする際には—社會的歴史的の側は措て、單に音をうつす上からみても—多少の障害があるのに、況して語調の種類の繁冗な支那語の如きは、「トランスクリプション」に大なる困難がある。この上には音的文字の場合と同じく、餘りに科學的ならぬこと、分別書き方のこと、書き方に統一を必要とすること、など種々の注意を要するのである。

第五章　聲音法の標準

寫音的文字の行はるゝと否とは暫く措いて、苟もいきた言語を教授する以上は、少くも其發音法はいきた標準を外れぬやうに務めねばならぬ。其上に注意すべき第一は、人工的な、自然をはなれた發音を避くることである。今その一二の例を英語によつて示せば、先づ諸種の語詞を各ひとつ〳〵發音した時と、それが集て文をなした時とは音が異つて來る。それを一つ〳〵に讀むときと同樣に、文中にある時も發音すると、其各個の場合は全く正しいにも關らず、文全體としては、全く英語ならぬ英語を生ずる。(「ハウ、ヅ、ユー、ヅー」(御機嫌よろしいか)の「ヅー」(爲す)の語も、それ自身の音は duw であるが、それが「ハウ、ヅ」と文中に入ると全く其母音を脱落して、單に一子音「d」となる。それを元來通り「ハウ、ヅー、ユー、ヅー」の如くいへば、あやまりである。「デー」(日)「フオルド」の如き語と他の語と複合する時は其音を變じて「ヂ」「ファド」に近い音となり、即「ホリヂ」「オクスファド」の類となるのを、元の通り發音しては可笑しく聞こえる。又普通談話の時の發音と、演說などのあらたまつた場合とはちがふ。即ち今日の英國人は普通は「カーント」(能はぬ)といひ、

決して「カンノット」とはいはぬので、若しいへばそれは演說などの殊に嚴格を裝ふ場合である。しかし演說などは、寧ろ第二次的な人工的なものであり、學習者は先づ通常の談話體の發音から入るべきのである。其他外國語發音は、必ず其國語の標準たる首都の言語によるべきこと、獨逸のやうな開化の中心の多い國でも伯林語によるべきこと、通俗の發音がよいと言ても、餘り通俗に流れて敎育ある中等社會の標準をはなれ、卑賤（ヴァルガリズム）に流れぬやうに心掛くべきこと、稀に用ゐらるゝ語の發音等、此側に重要な注意を與へねばならぬ。

第六章　聲音學大意の學習

單に實用の目的で一國語を學習する學生は、勿論聲音學を完全にをさめるほどの必要も無からうけれど、苟も語學の敎師たるものは、此學に精通せねばならず、且つ聲音學は、比較的勞力が少くて効果の多い學問であるから、學生も其大意に通曉するのが得策である。「フィートル」の聲音學大意（エレメンテ）若くは「グランヂェント」の獨英聲音論の如き書によつて其大意を講ずるのは、我國の歐洲語敎授上にも、最必要なことと考へられる。近來實驗的聲音學が漸く盛になつて、音を客觀的の實驗によつて測定する方法が發達しつゝあるけれど、しかしこれは未だ敎育に用ゐるまでには進步して居らぬやうに思はれる。聲音學練習上に最容易く且つ有益なのは、寫音文字の書き取りをすることで、從來歷史的文字で敎育されて誤つた發音に染み込んだ學生でも、この方法を行つて、大部分の矯正をする事が出來やうと思ふ。聲音學の實用的語學に於ける必要のいろ〳〵、聲音の明かな考が、語の形態及意義の理會を助けること、從て聲音論は文法の最重要な一部で、從來其學習を蔑にし

たことの科學上にも實用上にも大いなる誤見であつたこと、等爰に詳說せぬ。

第七章　談話語から始めること

文章語即ち文語と、談話語即ち口語との關係に就ては、近世は前代と全く異つた見方をするやうになつた。即ち前には口語は文語から頽れて來たものゝやうに考へたのを、今日では文語は口語の源泉から發生したものに過ぎぬといふことになつたのである。文語と口語とを、出來得べきだけ近い程度迄密接せしめること、及び其近接を永く保つて行くことは、今日の言語學の理想であつて、歐洲の諸現代語のやうに文口兩語の相近い國語に於いても、その學習はまづ談話語の側から始めねばならぬ。百年若くは其より以前の著書を、實用的語學の教科書に用ゐることは、今日の教授法の厭忌するところで、英文學專門の學校では兎も角、實用語學上に「スケッチブック」や「ヴイカー、オフ、ウエークフィールド」などを用ゐることの愚は、我國でも既に認めたやうである。原著者「スヰート」は、古い文書で教へられた學生が、談話に際して其古書上の語を用ゐ、誤解と嘲笑とを招いだ例を示して居る。諸曲などをよみ習つた外國人が、われ〳〵との談話に、肯定の意を示す爲に「なか〳〵」の語を用ゐたら、いかに可笑しいだらう。其他實用語學上口語より入るとの、多く有理で又た有益な點は原書に讓つて爰には略す。

第八章　語學上に存する困難

外的の困難—自國語との關係—內的の困難

四ヶ條ほど—聲音學習の困難—困難は果して其語の活用組織の複雜に存ずべきか否か

の論―眞正の困難は語彙の習得に存す―すべて國語は同一に困難なり

言語教授及學習法の本旨は、即ち新らしい言語の考究に附隨する困難を、出來うるだけ除去する方法を講ずるのであるから、先づ言語の學習上には、果していかなる困難があるかを見ねばならぬ。語學上の困難の第一は、即ち外部のもので、良好な文典、辭典、又は教科書の欠乏して居ることから、その國の文字組織の眼新らしく、また非音的に錯雜して居て入り難いこと等である。第二は內部と外部との中ほどにある困難で、即ち外國語と自國語との關係である。普通、自國語と近い關係を有つた語を學ぶのは容易い、とされて居つて、英人が佛語を學び、伊太利人が羅甸を學び、西班牙人が葡語を學ぶなどは、皆容易のことゝなつて居る。然し一方に利益があれば、一方に必ず弊害があつて、相似寄つた

外的の困難

自國語との關係

語を學ぶ場合には、常に混雜と誤解とを免れぬものである。同一音の語で、兩國で著しく異つた用ゐ方のものもあれば、又た一方の國では常に用ゐながら、一方では稀に用ゐるものもあり、其明かな用ゐわけは常に困難であり、又た相近い文法上の構成など、時々混雜する畏れがある。もし外國語を極めて粗末に學んで滿足するわけならば兎も角、十分其語の深い智識を得るのには、自國語と近い國語だからといつて決して容易なものでは無い。其語族も未だ十分に明かならず、東洋の果てに孤立して居る我國語は、此點では利益も弊害も受けぬわけであるが、たゞ國人が二ヶ以上の親族的關係ある國語、例へば英獨佛以等を學ぶ場合に於て、此點の利益と弊害とを感ずるやうになる。

他とは關係無く各國語を通じて其內部に一般に存在する困難は四個ほどある。第一は論理に關したことで、即ち多くの外國語を

內的の關係四ヶ條ほど

學んで、それになれた人でなければ外國語には極めて不道理な非論理的な多くの慣習があつて、それが大なる困難を供することを感ずるであらう。しかし非論理不道理といつても、それは單に自國語を標準として、それと反對であるからのことで、勿論絶對的のことでは無い。ちよつと國語と英語とを比較してみても肯定と否定との「イエス」「ノー」の用ゐ方は、國語の「ハイ」「イヽエ」とはまるで別で、常に初學者を迷はせる。また吾人は通常「十粒の米」「歸納法の論理」といふが、英人には「米の十粒」「論理の歸納法」といふ方が自然である。かやうな例は枚擧するにも及ばぬことで、慣用句の上、文法的構成の上、各國語はそれ〴〵特質を存してその一を標準にすると常に誤まりを招ぐことゝなる。印度歐羅巴語の文法上の男中女の姓などは、殊に我國人をして非論理、不道理の感にたへざらしむるものである。第二は諸國語が分類上の粗密を異にするために困難を招ぐのである。一國語では極めて細かく分類して、之に相當する多くの語を有する事物に對し一國語ではたゞそれを概括したひとつの名をしか有せぬなどといふ點で、英語の「ウヰル」と「シヤル」とが單に未來を示す場合と特別の意味を示す場合との如き、我國人の殊に困難とする處で、又獨逸語では未來は「ヴェルデン」で示すけれど、なほ「ゾルレン」と「ヴォルレン」との用ゐわけの困難がある。國語の「ちがふ」なる一動詞に「異る」「過つ」「變ずる」等の諸義を含み、支那語の「三月」が「三ヶ月」とも「第三月」とも、「一年の第三月」ともなるなど、歐羅巴人には困難を供するといふが、われ〳〵が歐洲語を學ぶ場合にも同樣である。第三は言ひあらはしの極めて細密な場合と、甚だしく省略的な場合と一國語の上にも異つて居り、又た異つた國語を比較すると、大躰の上で此點の性質を異にする。「何故となならば……故に」とか、「未來は……なるべし」などは細かい言ひあらはし

しであるが、「友人の(品物)だ」は省略である。第四はいひあらはし方の簡約と否とであつて、例へば多く語尾變化のある國語で、所謂不規則名詞及び不規則動詞は、甚だしく學習者を困める。夫からある種の事物について、抽象的語詞の欠乏といふことがあつて、「アイヌ」語のやうな未開の言語では、殊にそうであるが、開化した言語でもなほ一々のてまかい場合の名稱はありながら、之を總括してあらはす一語の無いために學習者を苦しめることが多い。

言語學習の困難がまた聲音の上に存在することは勿論である。聲音學の學習の無い人は、隨分深く其國語に通じながら、一生自國語中に存在し無い一音若くは音の結合を正しく發音し得ずに終るのが常である。英語の「th」(清及濁)獨逸の「ウムラウト」、佛語の「i」及び諸種の鼻的母音、さては一般に「l」の音を完全に近く發音しうるものは、果して我國の語學者間に何人があらうか。露西語の「tya」と「tsha」

聲音學修の困難

とを聞きわけ發音しわける學者も、亦た幾何あらうか。これを思へば、吾人は純粋の實用的の側から見ても、語學の上に聲音學の大意が講ぜらるゝことの必要を感ぜざるを得ない。我國の學生がすべての單子音を發音し得ないで、みな其の後に母音をつけ「t」を「to」、「k」を「ku」、「tsh」を「tshi」などゝいつて怪しまないのを聞くたびに吾人は現代語學のかたはを嘆かざるを得ない。

語尾の變化、即ち活用の複雜なことを以て、外國語學習の第一の困難とすることは、西洋でも我國でも普通に考へられることであるが、しかしこれは十分に考究せねば、斷定し難いことである。英佛語等は、語尾變化の組織が獨逸語よりは簡約だから、佛英語は獨逸語よりは容易いとか、さては露西亞語の七個乃至八個の名詞の格は、此語の學習をして最困難ならしめる原由だといふことは果して眞理であらうかどうか。なほ古語についていへば、梵語や

困難は果して其語の活用組織の複雜に存するべきか否かの論

希臘語や羅甸語の困難は、その活用組織の複雜な點であるといへるか。多くの國語を學習した經驗のある人は、輕々しく此の點に肯定の答へを與へぬであらう。分解的傾向をとつた英國語を話す人は、古代希臘語の「mi」動詞の變化をみて、どうして古代の希臘人が此の複雜な組織を記憶したかを怪しむといひ、誠に活用のこまかい國語が、吾人に取て入り難いことは事實であらうけれど、しかし、一旦之を習ひ得た後は、却て利益を感ずるようになる。いかに複雜な活用や變化といつても、決して不規則に出たらめに出來たものではなく、類推の原則のはたらきで成り立つたものであれば、一旦之を呑みこんだ後は左までの困難もなく、又た一方に複雜な文法のある代り、一方には前置詞後置詞助動詞などの形態詞の面倒な慣用を習ふことの必要が大に減せられて來ることは、明かな事實である。英語の「ウィズ」と「バイ」との前置詞の用ゐになやん

眞正の困難は語彙の習得に存す

すべての國語は同一に困難なり

だ人は、印歐古語や露語などの造格がいかに便利であるかを感せぬを得ぬであらう。若し語尾變化の組織や、文法上の不規則例外などが、語學の重な困難の原因となるものならば、世界の言語中で、支那語ほど容易いものは無くなるはずであるが、これはまるで事實と反對して居るのだ。

さらば語學の眞の困難は、其語彙に存するといふのが、最事實に近いことゝなる。英佛のやうに、其語彙の大半を一にするものでは、一方を學んだ人に、他の一方が容易くなるのは勿論である。大抵の歐洲語の文法は、六個月も力を專らにすれば會得されるが、語彙に到ては伊太利語が英吉利人におけるやうに、前から其大半が知れて居る場合の外は、かゝる短時日ではその一部分も十分に憶えられるもので無い。かくの如く論じ來らば、いかなる國語も一方に容易な點があれば、一方に困難な點があり、絶對にいかな

る語が容易く、いかなる語が困難だといふことは決していへるものでないので、容易若くは困難の語は單にその國語の外部の狀況と、學習者の既得の國語との關係に本づくのであるとの結論に歸する。

第九章　教授法の一般原則

言語慣習の種々あること―「アーン」「オルレルドルフ」一派の誤見―文典及び辭典と其必要―所謂自然方法と其誤見―「ジアン」の方法―其國に行て其語を學ぶことの考へ―個人及び國民が言語習得の巧拙―語學に一般原則の存在すべきこと―歴史的及比較的言語學

言語慣習の種々あること

のこと、等。

前章に語學上の困難を列擧したが、これからこの困難を解く方法を考へやうと思ふ。既に述べた通り言語には有理な現象と、不道理な非論理な現象とがある。その發達して來た本源はいかにあるにもせよ、歐羅巴語の文法上の性などは非理の甚だしいものである。規則動詞は有理だが、不規則動詞は非理であり、又た同一音の語に全く反對の多くの意義を含有したり、相似た音の語が全然異なつた意義を有つたり、言語には非論理的の現象が多い。其他所謂慣用句（イディオム）といつて、其句又は文を成りたてる各單語の意義よりは全くはなれた意義をとる文句は、何れも非論理で、例へば「ハウ、ヅ、ユー、ヅー」で御機嫌よいかを意味する類である。それからまた同じ意味の語でも其つかひ方に差別があつて、例へば一方で英語では「スウヰート」の一語で示しうるのを、我國では「うまい」と「あまい」

「アーン」「オルレンドルフ」派の誤見

文典及び辭典と其必要

所謂自然方法と其誤見

とわけていふと同時に、一方では我國で事業の熟達巧妙を意味する「うまい」の場合には、英語の「スヰート」は用ゐることは出來ぬ。畢竟各國語にはそれ〴〵の慣習があつて、一方に有理なものも一方には非理であり、一定の規則を以て律することは出來ぬ。いはゞ數學的誤謬とも稱すべきは、即ちかの「アーン」「オルレンドルフ」「アーノルド」等の方法で、自然な慣用的の文句の學習をすてゝ、たゞ有理に作り出さるゝ、不自然な文句の練習にのみふけつたことである。

語學教授の上に文典と辭典との必要はいふまでもないことで、文典は一般の方法規則を記述し、辭典は言語の孤立した部分をのべるものである。尤も文典と辭典との區畫は、一定で無く、或國語では文典で取り扱はるゝものも、ある國語では辭典の範圍に屬せしめらるゝことがあるが、兎も角兩者の語學上必要なものたることは明かであらう。然るに近來言語教授の革命派には、かゝる文典辭典を用ゐるに反對して、所謂自然方法なるものを唱道し、丁度兒童が自國語を學ぶと同樣の方法によりて、外國語をも學生に教へこまうと考へた「グアン」一派の學者がある。然しながら吾人の見解をもつてすれば、此自然方法なるものは、兒童が自國語を習得するのは、後年外國語を習得する場合とは、全く異つた、とても比較にはならないほど、幸福な狀態の下にあるを忘れたものである。即ち始めて兒童が自家の國語を習ふ時にはその頭腦はまだ何等の障害も受けず清明であり、又たそのすべての時間をこの上に與へるわけであるから、單に摸倣といふ所謂自然方法でも、十分に習得したわけである。然かしなほ摸倣の不完全不十分なことは常にはたらいて、言語變遷の一大動力を形づくる。それが後年に至ての言語學習に於て、かゝる摸倣の方法にのみよつては、いかに不完全な結果が生ずるであらうかは、容易く想像される。且

「グアン」の方法

つ兒童は事物と其名稱と、云ひ更ふれば新事物と新語とを、常に同時に覺え、時には語の方が思想の鍵ともなるわけであるが、外國語の場合には、まるでかやうな狀態をはなれて居る。加之所謂自然方法の論者は、他の一方に、外國語學習の場合には、既に學生の心が發達して、概念を形り分類し推論する能力を發達して居ることを忘れたので、この能力によつて、外國語學習の場合に、文典辭典は其重要なる効用を奏するのである。

其國に行て其語を學ぶことの考へ

所謂自然的方法は、また大抵其語のはなさるゝ國に住して、其語を學習することの必要をのべ、又一般の人も自國にあつて、苦しんで外國語を學ぶよりも、直ちに其社會に入て住することの利益を思つて居るが、去かし此點には、十分の注意をせねばならぬ。單に摸倣によつて語學が出來ると思ふことのあやまりは、吾人の既に屢說いた所で、會話にのみ依賴して、一國語を習得せんとするのは、大なる間違である。先づ本國に於て適當な方法組織の下に、十分の脩養をつむと無く、直ちに其語のはなさるゝ社會にとびこむといふ事は、其人をして終に一語をも完全に習得しねざらしむる所以である。十分の豫修無しに其社會に入ては、いかなる語が上等で、何れが卑しいものであるかもわからず、標準言と方言との區別もつける事は出來ぬわけである。またたとへ、多少本國で豫習をした後に其社會に入たとしても、決して散漫に會話と摸倣とのみによらうといふ考へを有つてはならず、必ず常に正しい方法に從て、學んでゆくことを務むるのが必要である。之を要するに學習者の此點に注意すべき要件は、第一に本國で十分素養をなすべきこと、第二にその社會に入るには、出來うるだけ方言を混へず、最標準的な語のきかるゝ場所を撰むべきこと、第三に方法あり組織ある學習を、最後迄繼續すべきことである。自國にあつて、

個人及び國民が言語習得の巧拙

其國在住の外國人の群に入て學習するのも、一の便宜であるが、これも同樣に余り其本國をはなれて久しくないやうな、また餘り諸地方を旅行して、言語の不純になつて居ないやうな人を撰まねばならぬ。

人によつて語學習得の天禀に著るしき差異があるのは勿論である。言語の實用的習得は、唯記憶のよい模倣のうまい人が早く勝つので、必ずしも創成的（オリヂナリテー）の心性を要するものでは無く、創成的心性を有する者は、却て此點には鈍いことが多い。大文學者、大哲學者、さては大言語學者が、實用語學の側に甚だ拙い場合も少く無い。尤も創成的心性が必しも常に實用語學上の才能と反するといふわけでは無く、兩者の合一する場合も多くある。個人と同じく、國民全體の上からみても、此側の巧拙があるやうで、永い自國文明の歴史を有する英佛人の如きは、なるべく自國語を用ゐんとする傾きを有し、獨逸人は容易く外國語を用ゐる傾きを有つて居る。

語學に一般原則の存在すべきこと

かやうに個人により國民により、言語習得に巧拙の差はあるが、併しそれはたゞ度合ひの上のことで、根本的絶對的のものでは無く、各人各國民がみな同一の心理的原則に從てはたらくものとすれば、語學の上に、ある共通の一般の原則方法が存在することは明かであらう。いかなる人も、多少の言語上の記憶力、多少の聯想力を有しないものは無く、たとへ不變ではなくとも、少くも共通な、ある方法により、同じ道を歩みうることである。外國語の學習に不可能を感ずる人は多くあるが、去かし既に自分が自己の國語を習得しえたことを思へば、白痴であらざる限り、外國語の習得は不可能のことで無い。

言語學習の上に一般法則の存在すべきことを考へた終りに、つけ加へておきたいのは言語の歴史及比較の、實用教授及學習上に

歴史的及比較的言語學のこと

ける價値についてゞある。近來言語史學及比較言語學の發達に伴て、之を實用教授の上にも用ゐやうとする傾向があるが、去かしこれは餘程慎しまねばならぬ。例へば「フィート」「マイス」「メン」の如き、英語の不規則複數につき其原義に遡り、その實では正則の變化であつたことを知り、其今日の如き狀となつた徑路をたどるのは、實際面白いことにはちがひないけれど、去かしそれはたゞ面白いといふだけで、決してそれがために、これらの形の孤立の性質を減ずるわけにはいかず、かやうな方法で記憶を進めやうといふのは、果して功過相償ふべきか、否か、遽に斷定しかねる。又た語の意味の上でも、それはたゞ一社會一時代の慣用で定まるもので、その語源的意義や親族語との關係を知つた處で、毫も其眞義の記憶を助けることは出來ぬ。「なり」が「にあり」だといふことを知つたゝめに、却つて多くの舊派の學者は、其眞正の用法を誤まるやうになつたと思はれる。たゞ言語の歴史及比較が、實用の學習を助けるのは、即ち學生が既に今學ばんとする語と同系統の語を識て居る場合で、この際には教師は學生の既知の國語中から、同源の語をとり出し、相比較してその合一を示し、之によつて大に學生の記憶を助けることが出來る。ただ應用の範圍に注意して、繁冗な聲音變化の法則などをのべるために無用の時間を費さぬやうにせねばならぬ。

言語習得の上に利用すべき一の點は、偶然の類似、殊に音の似寄りである。學生が一語を覺える場合に其音が自國語中のある語と似寄ることを氣付く時は、大に記憶を助けるものであるから、教師は留意して其機會を應用するがよい。兎も角以上のべた所は、いかなる場合にも一般に言語教授の上に用ゐらるべき原則である。

第十章　教授法の特殊原則

文法的法則を教授する上の考へ—個々の場合に就ての學習—觀念連合の法則＋言語教授に連想の原則を用ゐる上の六個の主義—記憶を保つ方法、反覆—興味—讀本、文典及辭典の關係—語學教授における五個の時期

文法的法則を教授する上の考へ

言語教授上、まづ考へらるべきことは、言語の法則（ルール）といふことである。既にのべたやうに、言語は極めて非論理的なものであり、不合理な現象に富んで居るものであるから、法則とか規則とかいふ一般共通の項の下に述べうるのは、單に其一部に過ぎず、其他は他と關係無く、個々獨立の場合に就て考へるより外は無い。去かし或度迄言語上の法則を發見しこれによつて學ぶことは無論必要である。法則（ルール）の有効であると否とは、主として三個の條件に基くものであつて即ち第一には其行はるゝ範圍である。その規則に從ふ場合が多ければ多いほど、有効にちがいない。第二は、その有効の度合ひで、即ち取り除きの場合が少なければ少ないほど、規則は有効である。第三は、その確定、明瞭、簡約等の度合に本づく。云ひ更ふれば、之を學ぶことの容易ければたやすいほど、規則は有効である。英の名詞の「s」を加へて作る複數の規則等は最高い度に於て、悉く三個の條件をみたし、最有効である。この側からみると、語詞の形態上の法則よりも、文章法（シンタックス）即ち措辭法上の法則の方が、通常有効である。それは文章法上の法則には、取り除きの場合が極めて少ないからであつて、例へば我文語の係り結び

の法や、古代英吉利語に於て、間接説話に假設法を用ゐる法則など、みなそれである。

それ故に、法則が一の取り除げの場合をも有しないか、又は取りのけがあつても、それは一目でわかるものであるかのやうな時は、たとへ其法則適用の範圍がせまく、僅かに數語の上に限られてあるとしても之を學ぶ必要がある。またそれとはちがつて、一の法則が多くの語を含んで、適用の範圍が廣い時には、たとへ例外の場合は少なからずあつても、なほ之を學ぶ必要がある。通常規則正しい場合が、少くも不規則の場合の二倍もあれば、その規則は有効であるが、若し規則適用の場合は狹くて、例外の場合のみが多い時には、寧ろ個々の場合に就て學んだ方が得策であるので、例へば、獨佛語の名詞の性などは、其一の例外もないやうな特殊な場合の外は、個々の場合に就て其性を學ぶより外に仕方が

個々の場合に就ての學習

無い。かやうに一般の規則によつて律することが出來ず、個々の場合についてするより外はない時には、初學者には、所謂「メカニカル、アイソレーション」といふ器械的な方法を用ゐて連想を助けるがよいので、例へば、一定の規則の無い文法上の性などは、其の名詞と之れにつく冠詞との結合を頭に入れるやうにするのが最も近道である。尤もかやうな器械的な方法は、單に語詞形態の上に用ゐるべきことで措辭法（シンタックス）などのやうに、推論と論理との助けをゆるすものゝ上には用ゐることは出來ぬ。もと措辭法上の法則は、語詞上の法則のやうに、單に類推の及ぶ範圍を示すばかりで無く、又た道理を推して用ゐることの手數を省くに用立つのである。

兎も角文法語法の上に、或程度迄は規則法則の助けによつて學習するのが適當である。近來の革新派のうちには、例へば「バウル」氏のやうに、吾人は規則によつてよりは、寧ろ手本によつて話す

とを習ふとか、又は「ストーム」氏のやうに生きた言語は規則によるよりは、寧ろ摸倣によつて學ぶべきものであつて、重に文典から佛蘭西語を學んだ英吉利人は、其いふことの全く合理正當なのにも關らず、全く佛蘭西語ならぬ佛蘭西語を話して土地の人から笑はれると、やうに論ずる人が多い。しかし吾人の見解によれば、この「ストーム」氏のいはれるやうな結果は、決して文典を用ゐて學んだゝめでは無くて、實は惡るい文典を用ゐた爲であるといふのが正當であらう。歐洲大陸の諸國語のやうに、羅甸の影響をうけて、多く共通な措辭上の組織を有つて居る國語では、例へば羅甸や獨逸の接續法の用ゐを知れば直ちに伊太利語のは推し知ることが出來るやうに文法上の法則を畧してよい場合も多いが、それでも、英語の措辭法などは、歐洲大陸の人には、こまかい規則によらねば十分に學びねないといふことであつて、語の性質の全く關係な

い日本人などが、歐洲語を學ぶ場合には、精密な法則の助けによるので無ければ、到底だめである。つまり文法的解剖を細かくして規則を精密に敎へると、又た大體に粗末にして置くとは、其外國語と自國語との關係、さてはそれと學生が既得の國語との關係によるものである。例へば、スヰート氏の「アングロサクソン」初步では、英語古今の文法上の變遷は非常であるにも關らず、僅か二十五頁で文法を終り、その內には語詞法(アクシデンス)から措法(シンタクス)辭迄みなはいつて居る。之に反し「カペレシッ」氏の支那語初步では、殆んど語詞法の無い國語を取り扱つて居るにもかゝはらず、文典の部に八十四頁を與へて居る類である。

もと文法の智識を得たのは決して言語それ自身の智識を得たといふわけでは無いことを、明かにせねばならぬ。例へば梵語の學生が、「デーヴ」(神)の單數變化の「デーヴス、デーヴ、デーヴム、デーエーナ

デーヴーヤ、デーヴーリット、デーヴスヤ、デーエー」を變化表に由て諳誦したところで、これは單に外部の觀念連合の一つゞきをにたに止つて、これらの語が梵文措辭の中に自由に用ゐらるゝ實例に接する迄は、實際の梵語に就ては何等の智識をにたものでなく、その外部の連想の強いことは、初學者は、變化表の順序に發音せねば、一の變化を思ひ出せぬほどである。又た佛語の「リユーン」(月)が女性であることを字書で知ても、之が「テ」の如き女性冠詞、又は「ベェル」「ブランシュ」の如き女性形容詞と結合することを知るまでは學生は何等眞實の智識を得たものでなく、「リユーン」と女性、但しは字書のsfの記號との間には、何等の結合も存在し無い。自然の觀念連合を無視したのは單語表の諳誦によつて語學をはじめることで、一日に二百語づゝ覺えれば、二週間で獨逸語學は卒業されるといふやうな主義は、まさか、今日では顧みる者も無からう。

觀念連合の法則

言語の實用的學習の心理上の基礎は上來たびたびのべたやうに實に觀念連合(アツソシエーション)の大原則に外ならぬのである。言語學習の全體が、とりもなはさず連想の一大系統を形づくることに外ならぬので、云ひ更へれば言語文章を思想動作事實と結合することである。單に言語の上から見ても、語詞は種々の見方によつて、種々の心理上の結合を形づくるもので、例へば「木、林、森」の如き語は一方意味の上から連合を作るが、又た一方には「木の、林の、森の」の語は、そのひとしく形容詞のはたらきをする處から連合を形づくる。さては上の六語は、又た均く名詞に屬することから一結合をなすし、又た「木だち」の一語は、意味の上からは上の諸語と一類であるが、形態の上からは「友だち」「人だち」の類と結合して居る類である。かやうな種々の心理上の結合は、其國を語用ゐる人の上に、無意識に成り立つて居るものであるので、文法は即ち之に定義を與へ、之を分

言語教授に連想の原則を用ゐる上の六ケの主義

解し、排列し之を有意識に示し出したものに外ならぬ。文典の名詞や動詞の變化表なるものは、つまり度々相近接してあらはるゝために、其間に無意識の連想の成立つて居る一語の種々の形態を、簡約に示し出したものである。又た「リューン」が女性だといふことは、ただこれと所謂女性の冠詞「ラ」又は女性形容詞との間に、佛蘭西民族の無意識の連想が成り立つといふことを示したものにすぎぬ。文典教授の任にあたる人は常にこの心もちを有つて居らねばならぬ、

連想の原則を言語教授の上に用ゐるには、次の六ケ條はどが重な主義となる。第一には最しば〳〵あらはれ、又た最必要なものを先頭に示すこと、さきに得た連想といふものは、前立つ連想のために混雜させられないこと、之を成立たせるのに多くの時間と勞力とを費したことなどからして、最も強く學習者の頭腦に印象されるものである。それ故に、言語の學習又た教授に當つては、

高等な文學の語彙や措辭に立ち入る前に、まづ普通談話上に最多くあらはれ、最必要な語句、慣用句、及び構成などに就て、強い連想を形づくつておかねばならぬことである。語學は先づ談話語から始めよといふ主義は、即ちこの點に應ずるのである。第二には、相類したものを共に示し、さて次に第三として、これと他の異つたものとを比較對照し、そのうつりゆきに苦勞が無くなるまで練習することである。例へば英語名詞の複數を說かうといふならば、先づ最普通な「s」語尾をとき、多くの例によつて十分心中に入らしめ、次に母音轉換による者「メン」「ギース」のやうな場合をあげて、十分之を習得せしめ、さて終に、規則變化と不規則變化とを對照する。その對照の場合にも、注意して、自然に相似た性質のものを集めるやうにし、例へば「ハンヅ」と「フイート」、「ダックス」と「ギース」、「メン」と「アニマルス」。かやうにして、この双々相異つたもの、

間に、一種特異の連想が成立つて、一方は他方を想ひ出し、又た共に複數の想念に相應するやうにする。獨逸語の「デア、バンド」と「ダス、バンド」などの類も、始めは双々關係無く各別に教へ、學習者が十分に習得し終つた後に、始めて之を比較してみせるやうにする。かやうにせぬと、學習者は常に誤解に陷るやうになるら。

第四には、連想を出來うるだけ確實にするやうに注意すること。例へば羅甸語の変格の用ゐの例を示すときには、文法家は注意して、その與格とまぎれぬやうな場合を撰まねばならぬ。また初學者の用本としては音質や音量の十分よく記號せられたものを用ゐねばならず、少くとも教授にあたつてはこれらの點を初めから注意してやるようにせねばならぬ。もし羅甸語の學生が、はじめから「ラボル」(仕事の義)と「ラーボル」(滑る義)と、又たは「ポプルス」(人民の義)と、「ポープルス」(白楊樹)との如き區別を眼と耳と兩方によつて明かに區別し、單に前後の關係によつて判斷することをやめたならば、其學生はなほ早く羅甸語を學び得たであらう。我國語のやうに、長母音、長子音が常にあらはれて、最多くの場合には、短母音短子音と意味の分化を示す時、又今日われ〳〵の方言におけるやうに、語調の差異で意味の變化をあらはす國語例へば橋、箸、端の如き同音異語を、調子で區別する場合の多くあることにあつては、其初めから重きを茲に置て、連想を確かにせぬと、終に之を正すことが出來なくなる。外國人が國語をはなす時、多くは此點を蔑視し、長母音長子音を短母音短子音に發音して、單に可笑しく聞こえるばかりで無く、屢誤解と不明とを來すことは、人の知るところであるが、われ〳〵が外國語に對する場合にも亦た同じことである。ある特別の目的のためにする場合は措て、露西亞語のやうな複雜な語調の組織を、初學から其記號のつけて無い讀本に據

て教へてまうといふ樣な方針は、此點で誤まつて居る。云ひ更へて見れば、學習者の才能を練習し　其智識を試みつゝ進むために初めから音質や音量の記號のつけてない教科書を用ゐて、反覆して憶えこましめやうといふ從來多く採用せられた教授主義は、或點迄は、連想を重んずるこの點の主義を破つて居る。音の質量即ち音の長短高低强弱等の記號は之を用ゐないで、學生をして之をあてる樣に、想ひ出すやうにし、又は他の辭書などを用ゐて、時を費し頭を苦しめて之を探し出すやうにするのが、その智識を增し又た之を確かにする所以だといふやうに考へることは大々的の誤解である。かやうな方法は、たゞ無益の勞力と時間とを費すばかりで無く、却て學習者の連想を弱め、終生治することの出來無いやうな邪しまな誤りに陷らしめる基である。要するに初學者の教科書に於いては、必要なる音質音量の記號は、明瞭確實に且つ反覆して、其書を通じて附けて置かなければならぬ。即「カペレンツ」氏の支那語文典の如きは、この點で最十分の注意を有つたものである。兎も角も、學習者の智識を試みること、及び之を練磨することは、學生が其問題に附て、十分明瞭な智識をえた後にすべきことで、初めからやるべきことでは無い。

第五には、連想を直接に具象的ならしめて、間接に抽象的ならしめぬことが必要である。すべて順序によつて事物を記憶するのは間接に抽象的な連想を呼び起すことであつて、例へば名詞の格の變化を習ふにしても、一番目二番目等の如く記憶するので、これはやゝもすると、實際適用の場合に誤謬を來すもとである。數詞などでも、一から順序に言つて來ねば、記憶を呼び起すことが難いといふやうになり、單獨に急速に其中の一つを用ゐやうとする時に、屢誤謬を來すことは、かやうな方法によつた學習者に於

て、屢見るところである。故に學習及教授に際しては、其事物自身に直接の連想を形づくるやうに務めなければならぬ。第六には交換連想（クロス、アッソシエーション）を避くべきこと。これは又たいふまでも無いが、然しその明瞭なだけ、それだけ多くは此點の誤謬に陷つて居る。既に今日のいきた談話語から入るとした場合には、これが十分明かに確かに習熟せられた後でなければ、決して高等の文學に入てはならぬ。殊に近古又は古代の文學などに立ちいつてはならぬことは、極めて見易い道理であるが、今日の教授法はまるで此點を蔑視して、日用の談話文章も、高等な文學も、さては古代文學も、皆同時に學ばしめる。甚だしきに至ては、これらのすべての範圍から材料をとり、それを一つにかためて初學の教科書を作り、以て趣味の豊富を得たと稱するわけである。何と間違つたことでは無いか。かやうな方法は、つまり學習者の頭腦に「クロッス、アッソシエーション」を起し、極めて卑近な現代語と極めて高尚な古代語とを混合して話しをするようなことになる。「アーヰング」と「ヂッケンス」とをつなぎ合はせて、得意の談話をする英語學者は即ちかやうな教授法の產物である。其他これまでの獨佛文典に多く見るやうな文法的性の教へ方も、この點の誤りに屬する。即まづかく〳〵の語尾を有するものは女性なら女性に屬するといつて、これには僅かに二三の實例を示し、さて次に例外の場合として、澤山の語を並べ立て、餘り多く用ゐられぬ語までを並べ立てるのが普通であるがこれは學習者の連想を、正則の場合よりは却つて例外の方に強くして、正則に見るべき語に出遇つても、例外ではないかといふ疑念を、常に惹き起さしむる基となるので、「クロッスアッソシエーション」よりも今一層わるい所謂「インヴーテッド、アッシエーション

記憶を保つ方法

連想に對する注意を終つた後に來る問題は、即ちいかにしてかやうな連想を記憶に保つて行くべきかといふことである。これには、簡約から複雜に入り、少數から多數に進むといふ經濟主義が常に用ゐられる。語を習ふにしても、少數の語を十分習得した後で無ければ、新語に進でではならず。又た文法にしても、初めにはまづ大體の要領から立入て、漸次こまかい部分に及ばねばならぬことは勿論である。反復（レペチション）といふことは、連想を形づくるにも、亦た之れを記憶に入れるにも、共に必要な手段であるが、たゞこれが一の點を超ゆると、其効力を失ひ、却て有害となる。それは一部分に就てのみ過度の反復をすることで、一部に偏して過度の反復をすることの結果は、他の多くの必要な部分に適當な反復をする餘地を與へることが出來ずなり、且つ學習者の厭忌心を起して、他の部分に對する注意力を失ふやうになる。文典編纂者が、其用

反復

例を種々の異つた著書から集めて來ることをせずに、單に自分の想ひ附きに從つて勝手な例を製造するやうな場合に、甚しい危險が生じて來るので、かやうな場合には、同一又は同一種の語が反復して例の上にあらはれて來るにも關らず例にとるべき他の多くの必要なものには、手も觸れないで終ることが多い。

記憶は注意に依頼し、注意は興味に依頼するものであるから、語學教授はなるべく興味（インテレスト）ある方法によらねばならぬが、不幸にして語學教授の一般原則は、多く興味の原理と背馳して居る。人殊に兒童は、專ら經驗の無い新らしいものに多くの興味を生ずるものであるのに、語學は却て、なるべく學習者が既知の智識を土臺として、それに近いものから始めることをすゝめ、又た常に反復によつてその智識を確にすることを主張する。反復により、又た未知の事物と既知の事物との關係を明かにするによつて、學習者

興味

の興味を生ずるのは、教授者の多大なる手腕を要するので、此點に與ふるわれ〳〵の原則は消極的の者より外は無い。即ちなるべく緩漫に平たくやれ、しかし餘り度にすぎぬやうに注意しろ、といふにすぎぬのである。かの「グァン」の連續法（シリースメソット）なるものは、興味の誤謬に陷つたのである。著者「グァン」によれば、その方法は、次のやうな事實から氣付いたのである。「グァン」に娚がある。それが始めて水車を見てから、水車場の粉ひきの遊戯を始めたが、その時始終次のやうな獨り言をいつて居つた。「一番さきに甕へ粉をつめて、それから、それを脊負て水車へ持てゆく、……と、水が水車の上に落ちて、車がまはる、――すると、車が曰をまはして、粉がひけるやうになる」等のことを言つて居た。それを聞て、「グァン」はその連續教授法を想ひついたといふことである。しかしながら「グァン」は實に其兒童が有つて居つた興味は、これらの語詞によつてあらはされた事實の連續の上にあるので、決してこの連續した言語自身の上にあつたものでなく無いといふことを忘れたのである。氏の連續的教授法は、全く無用であると共に、全然學習者の興味を消滅せしめたものである。

讀本、文典及字典の關係

最後に考へらるべきことは、文典、辭典、讀本の關係である。言語の實用的學習の材料は、從來、(1)用書（テキスト）即ち讀本（リーダー）(2)文典又は語典(3)辭典（ディクショナリー）又は語彙（ヴォカブラリー）の三つにわかれる。既にのべたやうに、簡約から複雜に進むことは、語學の主義であつて、初めから細密な文典や、浩瀚な辭書を用ゐることの不當は云ふまでも無いので、今日では初學者の用としては、文典、讀本、辭彙の三者を一冊に兼ねた教科書が、專ら有効のものとして採用される。而して其中の文典の部では、たゞその讀本をよむために必要な文法の大綱を述べて、巨細の點には立入らず、もし讀本中に、稀有な場合や、例外があら

はれる時は註として記載するに止めて置く。又たその辭彙の側でもただ之をよむに必要な語だけを集めて置くことになつて居る。著者「スヰート」氏の「アングロサクソン、プライマー」は、この主義で成つた標準的のものであるといふことで、其他同著者の英國現代口語初歩や、また現在獨逸の「フィートル」氏の指揮の下に發刊されつゝある現代語の「スキッツニ」の叢書など、みなこの標準に從つたものである。

近來革新者の一派は、なほ其さきへ進んで、少くも初歩の時代には、文典といふものを用ゐずに、その讀本の中から、學生をして文や語の法則を發見し出させるといふ方法を主張する人があつて、これを「インヂエンチヴ、グラムマー」といふが、しかしこれは、ただ時を浪費し、勞力を非常にするばかりで、効過到底相償はぬ。尤も多少進んだ學生に對し、練習のためにかやうな方法を行ふの

言語教授における五ケの時期

はそれは別である。又た幼年のものには勿論大人に對してでも、文法を習熟する前に、器械的に讀本などを講ずる時期がある。その時に例へば「アイアム」、「ユーアール」、「ヒーイズ」のやうな變化の場合に遭遇したらば、教師は之をぬき出して示し、なるべく術語を用ゐずに説明して會得させ、また次へ行て、これらの形が出た時は、それが既得の何れの場合に屬するを問ひ、或は説明して行くやうにすることが甚だ有効で、文典學習の豫備となるのである。

言語學習及教授の方法は、五ケの時期を分つて見ることが出來る。第一は器械的の時期である。これは言語學習の最初の時期で先づ聲音から入る。學習者の自國語又は既知の國語を土臺として、其上に目的とする國語の聲音を學ぶので、學理と實際との兩方面から入り、いかなる音の結合、いかなる語の結合、即ち文も遲滯無く發音されることを練習するので、之には、たとへ學習者に多少

聲音一般の智識があつても、かなり永い時間を要する。聲音の練習に用ゐる語や文章にはなるべく普通に、なるべく必要なものを選擇し、各文各語の意義を明瞭に說き、次に來るべき文典や辭彙學習の豫備を形づくらねばならぬ。この際には、各語が其本義を存し無いやうな慣用(イヂオム)句又は慣用文「ハヴ、ヅ、ユ、ヅー」の類は、餘りとり用ゐぬ方がよい。しかし文法的には不規則な形態や變化を、學生の頭腦に入れるのが利益である。學生は未だ其不規則であり例外であることを知らぬから却つて早く迷ひ無く習得するのである。

第二は文法の時期である。勿論こゝの時期の區分は、たゞ大體の標準を示したので、第一期の事業が完成してから第二期に來るといふのでは無くて、或適當の點から後は、兩者は相並んで行くのである。又た文法の學習も、決して第二期に限つたものでなく、或點から後は、次ぎ〳〵の時期の事業とも並び進むことである。

讀本は、第一期には、なるべく簡明な、專ら音の練習に役立つものを取つたが、この時代からはやゝ複雜のものをとる。而してこの時期には、まだ文典は讀本に從屬して、其中にあることの大綱を知ればよいのである。第二期の終りから、文典はその國語全體(但現代のに關する「ヂエネラル、グラムマー」の域に進み入るが、是はなは現代の談話口語の範圍に限られてある。學習者が現代文語の文典に入るのは、第四期に進んだ頃からで充分であり、歷史的のや又た古代文語の文典は、第五期を終つた頃で十分である。尤も歷史的のや古代語の文典は、「ストーム」や獨逸學者の多くが、其實用語學に於ける効益を主張するにも關らず、われ〳〵には之を實用語學の一部として算入することが出來ない。

第三は慣用語句の時代である。この時期には、學生の文法及辭彙智識も大に進んで居るので、こゝには其各語の意味をはなれて、

多くの慣用的な語句や文の學習に入る。これは一部はこの目的にかなつた讀本から、一部は心理的區分法に從て排列された慣用句の「フレーゼオロヂイ」によつてする。既に「ストーム」其他の學者も視た通り、從來の語學がこの點を全く蔑にして居たのは、實に悲しむべきことであつた。從來の語學の下に養成されたものは多く語を知て居る。また細かく文の法則を知て居る。しかしいかにして其語を組み立てうべきかを知らないので、„tie in a knot", „turn up the gas", „make haste" „what's the matter?" のやうな簡單な日用句も、讀書からばかりでは容易に習得せられぬ。佛語には、たえず日常の談話中に起る慣用句が實に數百もあるが普通の學校教科書の上では殆ど全く教へられて居らぬ。一例を示せば英語の „it is kind of you" は „c'est aimable à vous" で „de vous" でなく、又た „it smokes here は „ça fume ici" で „il fume ici" とSへば全く義が異ることとなる類。文學によつて、例へば小戯曲等を讀んで、慣用語句を教へやうとする企圖は、また甚だよくない。小說戯曲中の慣用句は、或は甚だ混雜したり、或は難解であつたり、或は甚だしく卑野であつたりして、學習者はたゞ其理解に苦しみ、到底之を十分に習得する餘地がない。この點は是非獨立に教へられねばならぬ。

第四は文學の時期である。この時期に達すれば、學生は自由に現代文學中から其讀みものを えらみ、まづ散文の易解なるものから入て、漸次高等な文辭韻詩に及ぶのである。勿論文學の初期からでも、簡單な文學は用ゐて差支無く、殊に韻詩の小品は、日用の談話語と「クロッス、アッソシエーション」を生ずる畏れが少ないからよろしい。

第五は古代學の時期である。こゝに近古文學の講究に入り、漸次進んで古代文學に入るのである。

以上は「スペート」博士が實用語學の進歩的方法の時期の區分である。これらの各時期の事業はいかなる程度まで分かれ、いかなる程度まで並行せらるべきものであるか。良好な教授法の良好な成績は、一に教授者の手腕にまつより外はないのである。

第十一章　文典(語典)

語詞論と措辭論との區分—形式的及論理的措辭法

語詞論と措辭論との區分—形式的及論理的措辭法

措辭法—語詞論と措辭論とを同時に教授する方法—文法上の引例に就て—語尾變化の表—辭典編纂上の注意—辭典の二種類

言語は通常形態と其示す意義との間に、いろ〳〵の分岐不一致がある。例へば英語を例としても、同一の複數の考へが、「ツリース」「メン」「シープ」など種々の異つた形式で示されると共に、「ヒーース」「ツリーース」の如く、同一のsの附加語尾が全く異つた機能を有つて居る。これがために普通文典に於ては文法的形態を論ずる部分と文法的意義をとり扱ふ部分とを區分し、甲を語詞論(アクシデンス)といひ、乙を措辭論(シンタックス)といふ。語詞論に於ては、出來うるだけ文法的形態の意義にはたづさはらぬやうにする。尤も從來の多くの文法家によつては、語詞論は單獨の語に就てとりあつかふもの、措辭論は文における語の結合を論ずるものと解釋され、從て形態の種々の意義は、皆語詞論中にのべ、措辭論はたゞ文中の語位置及び語の解剖をのみ論ずるものとせられた。何れにしてもたゞ便宜上のことで、別に論理上の根據は無い。われわれは前に述べた方の主義に據て居る。

措辭論を二種に分つて、形式的措辭論と論理的措辭論とし、形式的の側では、まづ文法的形態から入て其意義を說き、論理的の

側では、まづ意義の區分をして形態を之にあてはめるので、例へば「人權」と「人の權」と、形式の側からは二つに分かれが、論理の側からいくと同一の意味を示す組合せとして見られる。この兩者の區分は、「カペレンッ」の所謂「アナリチック」と「シンセチック」の文典の別をしたのがはじめてで、同氏は其支那大文典に於て、此區別を明かに應用した。文典と辭典との區別については既にのべたやうに、大躰文典は一般の法則を扱ひ、辭典は孤立した場合を記述するといふわけであるが、これも嚴密な區分でなく、前置詞後置詞のやうな孤立した單獨語詞の用法も、多く文典の中にとかれる。これらは皆その國語の性質に從て便宜に從ふのみである。

簡約から繁密に入ることの主義は既に前章にも度々説いた如くである。新らしき語に對する今日の教授法の主義は、當初は、最簡約なたゞ大體を會得するに適當な文典を用ゐることであつて、

語詞論と辭論と同時に教授する方法

始めから精密繁冗な文典などを用ゐる時は、その三分の二は久しからずして學習者の頭腦をぬけ出してしまふ。また文法の學習に入る前の所謂器械的學習の時期に於て、既に教授者の注意深き指導によつて學習者は無意識に文法の豫習をすることが出來る。之も前章に論じた通りである。それからまた、文典に於て語詞論(シンタックス)と措辭論(シンタックス)との區別は、たゞ便宜的であると前に述べたがある場合殊に初學用の教科書に於ては、「之を合併して説くことが最便利であつて、展用ゐられる。「バイエル」「バッシイ」兩氏の合著なる「エレメンタールブック、デスゲスプロッヘン、フランツェーシッシュ」といふ獨逸人用の佛語書は、頗る良好の著であるが、これに語詞論と措辭論とを合せて説いて居る。例へば定冠詞の上に、まづ「ル、ラ、ヅ」の形を示し、直ちに次で「用方」の條下に、其措辭法を説く類である。「スチューント」の「アングロ、サクソン」初步も亦たこの方法を用ゐて居る。初學の

時から語詞論と措辭論とを分けて說くことの不便弊害は、歐洲に於ける羅甸希臘の古語敎授にあらはれて居る。即ち學生はまづ品詞の變化表を諳記し、その變化の用法を十分に習はぬ前に、直ちに辭書によつて其讀みものゝ講讀にかゝるために、種々の形態の用法は全く度外視することゝなり、後に措辭論に入て之を學んでも、終に十分之をその讀みものゝ解釋の上に用ゐえずに終ることが常である。希臘語の學生には「オプタチヴ」と「サブヨヤンクチヴ」との區別を單に其形態の異るばかりと思つて居るものが多い。かやうな弊害は文典の兩部を合せ敎へるによつて防ぐことが出來る。

文法上の引例に就て

引例は文典に於て最必要の部分である。例のあげて無い文法の規則や、說明は實用上殆んど何等の効能も無いといふことが、今日一般に許されて居る。例へばたゞに其直接に關係する規則說明の理解を明かにするばかりで無く、又た常に前々に出た規則を說明することとなり、講讀の助けともなり、以て學習者の直接の連想をすゝめる用にたつもので、又た文典中の例は、學習者がその讀みものゝ中に發見する他の例や場合の手本雛形となり、つまり讀みものと規則との連鎖の用を爲して居る。舊風の文典家、及び近來でも獨逸學者のあるものは、規則を重くみて、例は之に附屬したものゝやうに思つて居るが之は誤解である。例あつての規則である。しかるに又たこの例を餘り重く見すぎたゝめに、革新派の中には、例をさきに出して次に規則をあげるといふ方式をとるものがあるが、これは餘りゆきすぎて、やはり誤謬に陷つた。たとへ例をさきに出して置いたとて、學習者は決して之からさきには見ぬ。必ず規則をさきに見て、次に例に立ち返るゆゑ、つまり何の用にもたゝぬわけであり、また强て例からさきへ敎へこまうとすると、それは既に前章に說いた「インエンチーヴ、グラムマー」のあ

やまりに陷つたものにすぎぬ。

例の多少は、規則の性質と文典の大小とによるので、一の例外もなく又た極めて明瞭な規則や、或はまた餘り必要の無くたゞ敘述を完成するためにつけ加へる規則などは、例は無くてもよい。しかしあつたとても害になるわけではない故、まづ規則に例の不要といふ場合は無いとするのが安全である。又た「希望、願望、詠嘆の動詞」と云ふ樣な複合した、規則の敘述に對しては、少くも其各項一つ〳〵に相當した例が與へられねばならぬので、敘述にあげてある多くの場合の中に、たゞ一つか二つかの場合にあたる例をあげて滿足する不具は、在來の文典に多く見るところであるが、甚だ不深切のことである。凡そ良好な用例は、四ケはどの點に本づくので、即ち第一には曖昧な點無く、確かに且明かに規則を說明するのであること。一種の係結を例するのに、二種の係り辭を有する文をあげるやうなのはわるい。第二は他の文と關係無く理解せらるべきやうのものを撰むべきことである。第三にはその文典の取り扱ふ國文の上からとるべきこと、これは殆ど自明のことで英語の例に佛蘭西語を持て來るものも無いわけであるが、たゞ注意しておかねばならぬのは、時代の上の考に外ならぬ。現代の英語の說明用例に、「アーギング」やなほ進で「シエークスピアー」などを引て來ることは、まだ〳〵今でも隨分行はれて居る。第四には例はなるべく異つた種々の著書や場合から集むべきことである。文典の著者が任意に勝手に例を作るために偏頗な同一の例が度々反覆されることの弊害は既に前章に說いた。それからまた、例としての引用文は、其の意味を說明するのが必要であるが、しかし必ずしも譯をそへるには及ばない。餘り精密に譯すると、學習者は一見して其意味を理解するため、こまかい文法の搆成を調べずに

行きすぎる弊害に陷ることはやはり編纂者及教授者の手加減にまたねばならぬ。

語尾變化の表

印度歐羅巴語のやうな語尾變化に富んだ文の文典に於ては、名詞動詞形容詞等、すべて變化の表の作り方が最大切なことゝなる。既にのべたやうに、この點にもなるべく器械的のことをさけて、直接に連想を進めるやうにせねばならぬので、例へば名詞の性は冠詞と連想して記憶するやうに、形容詞の變化は性の知られた名詞と共にするやうな方法につとめねばならぬ。かやうにして既に間接に習得したものをまとめて變化表の上に明瞭に示し出すによつて、變化表の實用的價値は存するといふものである。變化表はまづ音變化其他の現象が入りこんで初學者の理解を苦しめないやうな語を撰んで例とし、これから始めねばならぬ。又た變化表中の種々の場合に同一の語を用ゐて示すのがよいか、異つた語を用ゐて示すがよいかは問題であつたが、これは無論同一語によるのがよろしい。同一の語によれば、均しいところは明瞭に均しく、異つた處は明瞭に異つて、學習者の理解を早くする。之に反して例へは名詞の格の變化などでも、各格に異つた語を用ゐて例示した日には、どれが均しいのか、どれが似て居るのか、甚だ不明瞭なことゝなる。

「ベルチー」の獨逸文典にした樣に、例へば「ヴルデン」動詞の變化を示すのに、之に伴なふ形容詞を一つごとに異つたものにし、例へば「イッヒ、ヴルデ、グラッセン」「ヴー、ヴルデスト、ベーセ」「エル、ヴルデ、ゲホルザム」の如くするのは變化を習ふと共に語をおぼえるといふ主義から來たのであるが、之は主客を混同した方法である。

文典記載の精粗が、その文典の性質、學習者の程度に應ずることは勿論である。簡約といふことは、いかなる文典にも必要で、殊に

引用參考を目的とする文典にそうである。尤も初等の文典では說明や例證は十分豐富で無くてはならぬから、その簡約は、たゞ文典の範圍企圖を十分に制限することによつて行はるゝので、決して其必要な部分を省しむることをしてはならぬ。この點で最巧妙についまつた文典の例として「スヰート」は「ガベレンツ」の支那語文典(アンファンクスグルンデ)初歩と、「アスボス」の簡約露語文典(クルツェ)とを推した。

第十二章　辭典(字書、語彙の習得)

辭典の內容及文典との關係—辭典の範圍に關する三ケの注意—辭典編纂に關する外の側の注意(簡約にする上の方法、體裁上の注意語の排列)—內の側の注意(意義の說明、引例、引用、文法的記載)—論理的辭典。

辭典の內容及文典との關係

既にのべたやうに、文典は言語上の一般の規則に概括せられる部分を記載し、辭典は之に反して個々の孤立した場合を記述するのである。去かし其間に嚴密な區分は無く、殊に實用上の辭典には、多少一般の規則としてみらるべきものゝ掲載されることがあり、またそれが實際必要である。まづ諸種の慣用句(イヂオマチクフレーズ)は、之を組みたてる個々の語の本義をはなれて、孤立した意義を發達したものであるから、辭典の中に說かれる。それから、教科用の文典の中に說くには餘りてまかすぎるやうな文法的規則の諸點が、辭典に記載されるので、さやうな辭典はまた一般の法則から類推すはことの出來無いやうな文法上の現象をとり扱はねばならぬ。例へば歐洲諸語に於ては、個々の動詞について其次に要求する前置詞の種類又は各詞の特殊の格を記し、其用ゐ方を十分に說明せねばな

ちぬ。英語ならば「シンク、オヴ」、「シンク、アバウト」、「シンク、オーヴー」などの一々の用ゐを説くことで、獨逸語ならば動詞について其格の支配を記載するのである。それから正則變化以外にはたらく所謂不規則動詞の活用法も、一々其語に就て辭典に記しておくのである。辭典に記載さるべき事項は、大體かやうなものであるが、玄かしいふまでも無く、辭典は「リファエレンス」のために用ゐるもので文典の様に讀過學習されるもので無い。三百頁の字典を一日に十頁づゝ憶え、一ケ月で諳誦し盡したといふ「グァン」氏の大腦力は、到底常人の望むべきところで無い。

辭典の範圍に關する三ケの注意

辭典編纂に必要な第一義は、その範圍に嚴密な制限を置くことである。現代の外國語學習者に利益を與へる辭典の內容は、その國語の現代の標準語の範圍に限らるべきもので、たゞそれに、高等な文學の中に存在する少數な古代語と、幷びに文學や談話中に屢あらはれる俗語方言が採集されてゐれば十分である。かの新英字典のやうに、千二百年から今日までの語をあつめたといふものなどは、單に數種の辭典を一列の「アルファベット」の下に混成したものにすぎぬので、何等實用上の價値も無いと、「スヰート」は排斥したのである。この事は獨り外國語の辭典ばかりで無く、うつして今日世に行はれるわが國語辭書の多くの上にもいはれることであらう。次に注意すべきことは、語學上に用ゐる辭典と「サイクロペヂァ」との區別を明かにすることである。もと辭典は語を説明するもので、「サイクロペヂァ」は物を説明するのを目的とする。一動物一植物の名を説くにしても、「サイクロペヂァ」の方は、詳しく其博物學的記載をして、其屬する細目等を云るし、なほ繪畫でも挿んで詳しく説くが、かやうな説明は、辭典の上には不必要である。數百言を費して性質を説明するよりも、其事物に最近い性質をもち、

辭典編纂上の注意外の側

讀者に最親近な一事物の名をあげて置く方が利益が多い。さうして主な注意は、其語の形態變化、及びこの語を含有する慣用句等の側に與へられねばならぬのである。第三の注意は、發音記載のことである。近來の辭書は大抵所謂發音辭典で、其方法は一般に歴史的綴字を先にして、之に寫音的文字で發音をつけることである。「ミハエリス」及び「バッシイ」氏の寫音的佛語辭典のやうな組織は、學問用の物で、今日ではまだ實用とはなり難い。

なほ進で辭典編纂の上には、その內の側と外の側とで、數條の注意すべきことがある。まづ外の側には三箇ほどの場合があつて、その第一は、辭典はなるべく不必要な餘計な部分を省いて、簡單にせねばならぬと共に、其必要な部分には、十分の頁數を與へて客ならぬことを必要とする。これは辭典ばかりでは無く、何の部分でもさうであるが、かの坊間に多く行はれるやうな、單に大なる辭典の中から、引例を除き説明を略し、其他詳細の記述を省いて作つた簡約字典の類は、みな例へば「リッテル」「スコット」の簡約希臘字典のやうな惡るいものになつてしまつて居る。辭典を簡約にする方法は、かやうな亂暴なことでは無くて、まづ冗長な餘計な事實を除去することによつてなされる。二ケの語が合はさつて、別に一の新らしい意味をも生じないやうなものは、實用辭典の中に記載される必要がない。「ハットトレッス」の語を採集した辭典は、また「ウザウト、エ、ハット」をも採集せねばならぬわけとなる。説明の必要の無い熟語や支語は省くがよい。たとへ之を記述する大辭典の場合に於ても、その熟語の第一者の條下に並べて書いて置けば澤山で、説明をつけるに及ばぬ。又た辭典は前に述べたやうに、「エンサイクロペヂア」的の語や、今日では既にすたれて日常談話の上には勿論文典の上にも見當らぬやうな語を嚴密に省き去ることによつて、

大に簡約になされる。bezan, bezant, bez.l, bezar, bezole, bezonian, bezzle, bhowanee, bluung, bia, biangulate, biangulated, biangulous, biangular の如き語を集めて、採集語數幾々萬言とふきたてる大字書の類には閉口である。實用語學の學習者は、語數の多少によつて、字書の價値を判じてはならぬ。

現行の辭典は、必要な慣用句の上に、十分の注意を與へて居らぬが、もし之を十分に採錄する場合には、やはり單語に對すると同一の注意を以てせねばならぬ。不自然な句や、又た今日では全く用ゐられず、恐らく現代の國民に理解されぬやうな文句で紙幅をみたすとの無いやうにしたい。其他また稀に出て餘り用ゐられぬやうな語や句の説明は簡單にし、日々普通に行はるゝものには十分の解釋を與へるやうにせねばならぬ。二十年三十年も英文學に從事した學者が、一度か二度しか出遇ぬやうな語や句に、

縷々數十言を費し、毎日たゞに用ゐるやうな慣用句には、一言も及んで居らぬやうな權衡上の誤謬は、現用の辭典に通じて見ることが出來る。それから適當な略語を用ゐて、記載を簡約にすることは、今日一般に行はれて居る。辭典編纂の外の側で第二に注意すべきことは、取り扱ひ及び引用に便利の躰裁をとるべきことである。辭書の最大なる障害は、その容積の大なる事であつて、之を簡約にするために前述のやうな種々の方法をとるべきのであるが、次にはその中の語を發見するに、なるべく容易いやうな躰裁にせねばならぬ。索引をつけること、種々の目につきやすい字體を用ゐること等、すべてこの點に資する。殊に一語の説明が數頁にわたるやうな場合には、餘程巧な方法を用ゐぬと、讀者は一語の單一な説明を求めて數十分を費し、終に之を得ることが出來ぬやうになる。「リットレ」の佛語大字典や、又は新英字典などの大なる

欠點は、こゝに存在する。この側では伯林の「ランゲンシャイト」商社で出版された辭典類、例へば「マレット」の英獨字典などが最巧みにやつて居る。

外の側の第三の注意は、語の排列法である。一般に歐洲語の辭典は「アルファベット」の順にならべる。さかし「アルファベット」の順は、もと任意的なもの一定の主義のある者で無いから、もし學問的に排列する際には、例へば母音は母音で集める、子音でも音の性質の似たものを集めるとかいふ樣にするのである。さかし「アルファベット」の順序が、既に早く學生の頭にはいつて居る實用語學の場合には、その順によることが實際便利である。要するにこの點は其國語國語の性質によつてやるべきこと勿論で、英語の類では語の頭文字によつて排列するが、「セミチック」語のやうに、母音變化や前綴の用ゐの行はれる國語では、語根によつて排列する類である。我國語

辭典の伊呂波順によるか、五十音順によるかなども、この點の考へに上るのであらうが、少し問題外であるから論じまい。

さて次には辭典の內の側に、やはり二三注意がある。その一は讀句の意義の說明を、平易に簡單に明瞭にすべきこと勿論である。說明中に古語や、稀に用ゐる語や、俗語や、方言などがはいることは嚴禁である。二は引例で、辭典も文典と同じく引例が必要である。その三は引用(リフエレンス)で、これは文學書類に參照して、其書名、頁數、行數若くは章節などを記入することで、重に古代語の辭典にその必要が多い。その四は文法上の記載で、これは前にのべた通り、動詞形容詞の要求する格又は前置詞、前置詞や副詞の支配する格、不規則變化などを註する。國語ならば動詞の活段を記する類、發音の記載も同じく必要で、「ヴヤイルス」の支那語辭典のやうなのは、其最發達したもの。

內の側

辭典の二種類

文典に形式的分解的のものと、論理的總合的のものとの別があつたと同じく、辭典にも亦たこの二種がある。形式的の辭典は普通の「アル・ファベット」の辭典で、語によつて其意義を求めることであり、論理的の辭典は、之と反對に、意味によつて之を示すべき語を求めることで、これには、まづ始めに、空間、時間、物質、五感情操など、多く論理上の分類をして、これによつて語を採錄するより外に無い。我國の古風な乾坤門、人事門、等に分類した字引は、この最幼稚なものである。論理的辭典の最發達した標本は、Roget: Thesaurus of English Words and Phrases にみることが出來、この組織を採用したのが、獨逸の D. Sanders: Deutscher Sprachschatz で、何れも有名な著述である。兩者は何れも卷末に索引して「アル ファベット」順に語を集めてあるが、それを同一の頁中に上下に對照せしめたのが Boissière: Dictionnaire analogique de la langue Française である。語彙の

學習の上には、まづ形式的の側から始めらるべきこと勿論で、學生がかなり語の數を習得した後に、始めて其論理的の側は敎へられ始めるので、「スヰート」氏の英國口語の「エンメンタールブック」や、「フランケ」氏の佛語日用語句などに、其體裁をみることが出來る。以上は一般の辭典に關して、「スヰート」氏の所說の大體である。一箇又は以上の特種の書類の語をあつめ、之と關係をもたしめたものを單に「グロッサリー」といふが、その事や、又た語彙習得の階段等に就て章末に注意が與へられる。

第十三章　用書(テキスト)、讀本

讀み物の分類法二種—讀本編纂に關する注意—連結—讀片の長短—前後關係の明瞭—語彙の制限及撰擇—內容の親近—言語の

讀み物の分類法二種

簡約―變化を貴ぶこと。

「テッキスト」を用書といふのも、餘り不適當であるが、「讀みもの」とでもいつたらよからうか。學ばうとする言語の音が習得された時には、語學の重な基礎は讀みものにあるので、文典辭典はこれを助けて行くのである。讀みものは、まづ其記載の方法から、次のやうに相對して兩列の種類にわかれる。

(1)　concrete, objective――――abstract, subjective.
matter of fact, dry――――imaginative, poetical, ideal.
commonplace, trivial――――strange, sensational.
juvenile――――adult.

自國語の場合は勿論、外國語學の場合に於ても、第一列のものから始めて、第二の方に及ぶのが一般の順序である。たゞ外國語の場合には、學生の年齢教育などを考へて、適當にするのが必要となる、次に記載事項の上から讀みものは三種にわかれる。

(1) 事物(オブジェクト)の記載、種々の法則、原則等の叙述(ステートメント)。
(2) 叙事譚話。(Narratives, tales, stories)
(3) 對話(ダイアローグ)、會話。

この三種を合せた讀みものは小說稗史の類である。これらの區別は單に事項の上ばかりで無く、又た文法の上からも考へられる。即ち一方に對話と一方に記事及譚話との間の區別は、對話では動詞は自他對の三箇人稱に共に關係して現はれるが、記事及譚話では、單に他稱(第三人稱)のみにあらはれるといふ大なる相違があり、又た第一の記事と第二の譚話との間には、記事は現在のことを取り扱ひ、譚話は過去の事をとり扱ふといふ違ひもあり、つまり文法の側からみても、記事の最簡單で、對話の最複雜なことは明かであ

る。故に讀みものゝ排列に於ても、此順序を考へ、簡より繁に入るやうの組織にせねばならぬ。「スキート」氏の「エレメンタール、ブッフ」及び「プライマー」、「パッシイ」氏の「エレメンタール、ブッフ」等について、その排列の順序狀態等を調べるのがよい。Sweet: Elementarbuch des gespr. Engl., Primer of Spoken English; Passy: Elementarbuch des gespr. Franz. 其他「フィートル」氏發刊の現代語梗概中に出て居る「ロイド」氏の英文典なども專ら此點の參考となる。

讀本編纂に關する注意

一、連

さてこれから讀みものゝ編纂及教授の上に、數條の必要な注意が與へられる。第一は連結についてである。讀みものは、其內の部分が互に連結を保ち、統一を形づくり、同一書における語の反復は、學生の連想を强めて行くやうなもので無くてはならぬ。格言やことわざの類は、今日は用ゐないやうに孤立した語句形態を保存するものであるから、讀みものゝ中には取り用ゐたく無い。

二、讀片の長短

又た日常の會話は、前後の關係に乏しく、且つ餘り省略に富んで居るから、之を採集する場合には其の最標準的なものを撰まねばならぬ。第二は讀片の長短である。是は學者の年齡や程度に應じてゆかねばならぬ。初めの進步の遲い間に、餘り長いものを讀むことが、學生に倦怠を來すと共に、又たあまり短かいきれ〴〵ばかりを用ゐても、學生の連想を弱めていけぬ。「フィートル」及「デル」の英語讀本は、大部分に於て後者のあやまりに陷つたものと思はれる。(Victor, Dörr: Englisches Lesbuch は「シリーズ」で出て居る近來の好書で、聲音研究のために本邦へ來られた「エドワーズ」氏も、其中の一部を出して居られる。去かし「スキート」氏は此點の非難を與へた。)要は讀本編纂者は、一二頁の平均の長さの內で、種々に變更してゆくべきである。

三、前後關係の明瞭

第三には前後關係の明瞭についてである。學習者に一の未知の

語を敎へるにしても、前後の關係から想ひつきさうべきやうな方法で入らねばならぬので、例へば「日は東より出づ」、「週の第一日は日曜なり」の如くして、苦勞少く語を憶えるやうにしてゆく。

四、語彙の制限及選擇

第四には語彙に制限を置て、其適用の自由になるやう練習すべきことである。慣用句の採錄の必要もこの側に屬する。第四にはは じめには最必要な部分を撰で授くること。語彙に制限を置くと同時に、其撰み方に注意せねばならぬので、學習者が自國語に翻譯してもなほわからぬやうな讀みものは、初學の用書の中に入るべきもので無い。特種の職業、學術、遊戲、藝術等の個々の記載はやめて、たゞすべて此等の基礎になるやうなものを採錄すればよい。歐洲諸國で用ゐる讀本を、直に我國の初等敎授にも用ゐやうとする弊害は、既に認められて居る。慣用語句を採る場合にも同樣に注意して、格言や俚諺の上又は卑賤な俗語の上にのみあらはれるやうな慣用句はとり用ゐてはならぬ。

五、內容の親近

第五は記載事項の學習者に親近のものであるべきと共に、その言語自身と、時の上にも場所の上にも、調和したものでなければならぬことである。英語の讀本は、必ず現代の英國に關する記載でなければならぬ。英語で日本の書物を記載した物などに進んだ學生が後によむべきもので、讀みもの敎授の始めから用ゐべきで無い。「フィートル」「デル」兩氏の讀本など、英國の大人のよむには面白いかも知れぬが、現代の英語を理解するための獨逸人には、誤つた指針を與へる。これは十八世紀の英語の記載などを含有するからである。

六、語の簡約

第六は言語の簡約な點で、初步の讀みものは、文學的のものよりも口語的のものが優ることとなる。しかし極端にすぎて、卑賤な俗語とならぬやう、この間の調和をはかることが肝要である。

七、變化を貴ぶこと

第七は讀みものにおける變化の貴ぶべきことで、同一の文

法的形態、同一の語彙の同一樣の結合がたえず反復されることは、さけねばならぬ。「オルレンドルフ」や「アーン」や、「グアン」の方式は、この點の誤りに陷て居るので、すなはち「オルレンドルフ」は、同一類の文法的結合をくりかへしつゝ、一の必要な慣用例(イディオム)の學習にも及んで居らず、又た「グアン」の「シリース、メソット」は、具象的な客觀的な事物にばかりむいて、抽象的主觀的の側をすてたことである。スヰートは尙ほ進でこれから學習の階段と讀みものにおける興味とに就て論じ、それから編纂法の側から、讀みものゝ種類の論に及んで居る。

第十四章　國語間の關係—飜譯

自國語を土臺とすること—交換聯想—繪畫法—飜譯の必要—飜譯の階段—國文外譯

337130

自國語を土臺とすること

—實體教授

一般の言語教授法を各特種の國語にあてはめるには、それぞれの國語に從て適用を異にせねばならぬこと無論であるが、たゞ外國語學習の根底として動かすべからざる原理は、學者の自國語を土臺とせねばならぬことである。從て自國語の特質を十分明かに理解し音韻の上にも、文法の上にもこれと學ばんとする外國語の特質とを對比して進まねばならぬ。聲音の上では、彼我の母音はいかに其基底を異にするか、子音では、いかなる異種のものが彼の國語に存在するか、さては語調は何れの緩音に來るか、子音母音の結びつき方はどうであるかなど、それ〴〵の場合に徵して、異同を考査することとし、文法の側では、彼の前置詞と我の手爾波との關係、時のわらはし方の狀態、文章法の上では語の位地など、わが國人が歐洲語のやうな異族の言語を學ぶ場合には、其比

較考査すべき事項は、言語の全面を通じて存在する。問題でごく近い性質の英獨語などにあつても、例へば英では助動詞「カン」(能ふ)は欠體(デフェクチーヴ)として不定法を有せねが、獨語では「ケンネン」の如き不定法を有するため、英の獨語學生は迷ふことが多いといふやうに、自國語に存在せぬ形式が外國語に存在することから、用方の困難が起る。それと共に又一方には、反對に自國語に存在する形が外國語に存在せぬために困難が起るので、印歐諸語の文法的性の區別は近代の英國人の既に最困難に感ずるところである。殊に後に來る名詞の性によつて前の物主代名詞の性が支配せられるなどは、異種の國語をはなす民族には可笑しく感せられることで、例へば「ソン、フレール」(佛、彼の兄弟)の「ソン」が男女兩性を示すのが英國人には不思議で、初學のものはつい女性の時は「サ、フレール」とすると、スヰート氏は說く。これはそのまゝ我國にあてはめられる。

交換聯想

二國以上の國語の關係上、語學に最大なる危險を與ふるのは、即ち交換聯想(クロッス、アッソシエーション)で、これは自國語と外國語との間に起るばかりでなく、既得の若くは習得しつゝある二個口上の外國語相互の間に起るもので、又たこれは兩個の國語の性質が近ければ近いほど甚だしい。英獨佛等の語を勝手に入れまぜて話す學者が世間には珍らしくないので、當人は反て得意でもあらうが、甚だ聞き苦しいものである。同語族の多くの歐洲語々學を益隆盛にしやうといふ我國などでは、教授法の上に尤も此點を注意せねばならぬことゝ思ふ。交換連想を防ぐに必要な手段は、同時に二ヶ國語の學習を始めることを避け、一國語がある程度まで確かに習得せられるまでは、他の國語を始めぬやうにすることである。それに兩國語の相混じ相紛るゝやうの點を組織的に述べ述ねることも、この點の弊害を防ぐのに大なる効益がある。

繪畫法

自國語と外國語との交換聯想を防ぐために從來いろ〳〵の手段がとられた。その第一はすぐにその外國語で事物を考へろといふので、自國語で考へて之を外國語になはすやうなことをするなといふのであるが、之は無理な注文で外國語自身で事物の考へられるのは、その語が自國語同樣に深く習得せられるまでは不可能のことである。そこで第二の方法は案出されて、外國語教授を繪畫や身振りなどによつて始め、これによつて一度自國語で考へて後に外國語になはすことをさけ、其間に生ずる交換連想の弊害を避けうべしといふのである。去かし交換聯想は、決して一國語を一國語になはす即ち飜譯のためにのみ生ずるのでは無く、二ヶの外國語の間にも生ずる樣に、たとへ外國語自身で事物を考へることが出來たとしても、その間に自國語の交換連想は働くので、殊に前述の繪畫や身振りの方法は、其他にも弊害の多いものである。

飜譯の必要

自國語を外國語になはすこと、外國語を自國語になはすこと、つまり飜譯は、語學上到底廢すべからざる方法である。然るにランケの如き改革派は、曾てこの外國語を自國語に譯すことの方法を排斥したので、其說は譯讀法は心理上甚だ複雜な手段を要する。即ち、ハットなる英語を學んだ國人は、先づ之を自國語「帽子」に譯し、さて後に帽子なる事物自身の連想を得るのだから、つまり二重の手數になる。之を帽子なら帽子の繪畫によつて、その「ハット」なる事を示せば、一たび之を自國語に譯すること無くして、語と想念との間の直接の連想を得ることゝなり、心理上甚だ好良だと說くのである。去かしながらこの考は、心理上のはたらきはそれが複雜なために必ずしも困難だといふわけの無いことを忘れたので、自國語と之によつてあらはさるゝ想念との連結は、極めて强固であつて、理論上二重の心理的手順を要するからと言つて、決して

さまで困難を供するものでない。殊にかやうな繪畫を用ゐる方法の免るべからざる大なる欠點は、概括的の總名を示すことが困難だといふ點である。例へば帽子にも種々の類別があつて、たゞ一の帽子の畫を取れば、それはかゝる類別中の一つに屬さねばならぬので、これらを總括した帽子の概念は畫では示すことが困難であつて、之を見た學生は大なる誤解を生ずることゝなるのである。

譯續に反對して出た他の方法は、自國語に譯することはたゞ初學の階段で、少しく端緒を得たらば、すぐにかの國の語自身でその外國語を說明して行かうと云ふので、この方法は一方には交換連想をふせぎ、一方には言語の實習上非常の効益があると言つて主張せられた。さかしかやうな方法の困難で、効過償はぬことは、今又多辯を要せぬ。即ち飜譯は交換連想を强める力はあるかも知れぬが、飜譯は決して交換連想の原因とはいはれぬと。事物の定

飜譯の階段

義は決して精密にその事物を示すことは出來ぬので、即ち「ハット」なら、「ハット」の語義を英語自身で說明して、それが帽子の義を有することを明かにすることは容易で無いこと、即ち之を「帽子」と譯してしまへば一口ですむことを、非常に多くの語と時とを費さねばならぬこと。殊に學習者の習得した貧乏な既得の語彙によつて說明しやうといふのであるから、そのいかに困難であるかの事等を考へたなら、この方法の不可能な事は一目瞭然である。たゞ外國語を外國語自身で說くことは、語の實習上大なる利益を供するに相違無いから、やゝ進んだ學生に之を利用するのは最必要で、たゞ之を唯一の方法として譯讀にかへやうといふのが誤謬である。

之を要するに、譯讀の効用は之に爭ふことが出來ぬ。譯讀には大體三ヶの時期が區別されて、その第一期は、外國語を理會するのに最簡便良好の手段として之を用ゐるので、語は語につぎ句は句

國文外譯

について譯される。第二期には、譯はなるべく少くして、出來得る限り意味を文より取るやうにし、之に其外國語自身での說明を加へてゆき、さて第三期に至ては、自由に自國の日用語を用ゐて譯述し、彼我文派の異同を考査することゝなるのである。

さて飜譯の他の種類は自國語を外國語に譯することで、所謂國文外譯である。これをするにはまづ其外國語の十分の智識を豫期せねばならないと著者は說き、始め語の數個を與へ、次にその語から成りたつ人爲的の單文を示し、之を雜形にして國文外記の練習問題を與へるかの「アーン」一派の所謂「エキザーサイス、メソッド」に於て、著者はこまかな批評を與へて之を排付した。

既に讀んだ書中の事實に就て、問答體の自由作文をすることは、近來大に用ゐられて、既讀の僅小な事實に就てゞも、多くの問答をすることが出來、一方には既得の智識を確かにし、一方には之

實驗教授

を言ひあらはす能力を養ふのである。この問答體の自由作文は、一面には聲音の學習を加へて口で行ひ、一面には書いて行ひ、相伴て進みつゝ、終にはいかなる問題に就てゞも自由に書き且つ話すことが出來るのを豫期するのである。問答の一例を示せば、

"We can easily see that the earth is round by watching a ship sailing out to sea."

の一文から

what is the earth? what is the earth likee?, what shape is the earth?, how can we see that it is this shape?, how can we see that the earth is round?, what can we see by watching a ship sailing out to sea?

等多くが問が成り立つ。

かやうに兩國間の關係から飜譯方法の必要を說き來て、著者は最後に再び外國語の語詞文章とその想念とを自國語の媒介なしに

直接に結合するといふ實體教授を論じて之を攻撃して居る。所謂實體教授には三種あつて、即(1)實物を示す事で、「これが「ナヨーク」(白墨)」「これが「マイ、ノース」(私の鼻)」とやつて行く。(2)標本繪畫輪畫を示す事で、(3)手眞似身振り等身體の運動を示すことである。この方法の効益少く弊害に富むことは、既に前に繪畫法の場合に說いたと同樣のことである。

第十五章　會話

會話の効益及困難—現用の會話書及句集

會話の効益及困難

外國語教授上會話の効益は、一方それ自身の上に存し、一方その語を學び、又た學習者のその語における智識を檢する手段として用立つ。會話對話の困難で同時に効益ある點は、心のはたらきの確かさと速かさとを要することで、前章にのべた自由作文に於

現用の會話書及句集

ても學習者がその用書に就て十分會得した後でよければ出來ぬことである。故に個人の談話し得る話の範圍は比較的狹小で、たとへ自國語でも其文語及古語はよく讀み理解し得るにも關らず、之で談すことは出來ぬ。外國語學習の上でも、その會話は其國現在日用語の對話を學ばねばならぬので、古語又は文語の會話に陷らぬやうに心掛けるのが必要である。

この點で從來又た現今出版せられた多くの會話書句集(フレーズブック)の類は皆誤謬に陷て居る。多くの著書は、單に實際必要な慣用句を撰み之を組織立る上に失敗して居るのみならず、現代の日用語は、俗な卑しいといふやうな舊想に縛られた結果、半古代半文學の文章のみを會話に綴て居るといつて、之から著者は現行の諸種の會話書に就て、一々其可笑しな誤謬を指摘し、「ペンネット」の那威會話書を「ストーム」が出版したものを以て、この側に比較的よいものとした。

第十六章　文學

言語教授がまづ現代の口語から始まり、其十分習得せられたのを待ち、序を逐て文學教育に移りゆくべきものであることは、近代學界の精神である。これは初めから述べた通りであつて、先頭から高等な文學や古代文學を始めることの非理不當は、學問が明かに認むるところである。文學教育自身に於ても、易より難に及ぶ順序の必要なことは勿論で、先づ最口語に近い簡單な現代文學から始め、それから高等な散文に進み、さて古代の詩文に及ぶべきであり、羅甸の如き古語でも、「ヰルギル」などを初めから讀む必要は無い。文學の趣味を十分に理解するだけの素養の無い學生に高等な文學を強ひるのは、其國に對する永久の厭忌を生ずる原因である。

外國語教授法をわり

明治卅四年十二月二十日印刷
明治卅四月十二月廿四日發行

外國語教授法
定價金五拾錢

著述者　八杉貞利
發行者　高橋儀市　東京市神田區小川町一番地
印刷者　大西錬三郎　全麹町區有樂町三丁目一番地
印刷所　三協合資會社　全　京橋區弓町廿四番地
發兌元　寶永館書店　東京市神田區小川町一番地

不許複製

特約店

合資會社　富山房　東京市神田區裏神保町
東京堂書店　東京市神田區表神保町
勉強堂書店　東京市神田區錦町三丁目
川瀨代助　名古屋市本町三丁目
吉岡平助　大阪市東區備後町四丁目

高等師範學校教授
東京外國語學校教授
東京音樂學校講師
岡倉由三郎先生著

本邦唯一の發音學書

發音學講話

●全一冊●洋裝頗美本●定價金六十錢
●郵稅金八錢

●本書は言語の原料たる發音に就き科學の立脚地より其成立、轉化の公平なる叙述を試みたる者言語の學漸く講せられ言語の教授口に重きを加ふるに當り本書は國民教育に從事しまた或は國語漢文及外國語の研究者に必要なる言語を侯たず特に國民教育者は本書に依り自ら發音を矯正し兒童を教育せざる可らず一般の言語を知らんと欲せば本書を必ず一讀すべし運用の妙を讀者も雖も苟も知る者は本書を必ず一讀すべし著者は斯道の大家岡倉氏文體は明晰なる口語調加ふるに發音の圖解數十個を以て一度繙くに時は親しく先生の講筵に臨んで指道を受くるに異ならず實に本書は邦文發音學一般に對し唯一の書にして決して他に求むるを得す

金井保三先生著

第二版

日本俗語文典

全一冊

洋本頗る美裝本　定價金七拾五錢　郵稅金拾錢

在横濱市清國人發行「清議報」の批評(翻譯)

此書は金井保三先生の著はす所にして音訓(音韻)字句(言葉)篇段(言葉の組立)及轉折承接(言葉の句切り)法の四編に分ち剖析微に入り指示隱れたる所なし蓋先生其國語を他國人に教授せる經驗多きが故に唯に語法の繁變に精通せるのみならず且つ深く學習者の了解し難からんことを慮れて極めて其順序に注意し又語を操るもの應用常に誤るを以て說明一段の詳細を加へたり其苦心孤詣凡そ其致を受くるもの固く之を信じて之を稱せざるはなし此書即ち課餘の筆記より錄出したるものなれば用語極めて簡明平易に立論尤切實適中誠に東語(日本)教科書中の鴻寶に屬す故に東語に速通せんと欲するものゝために特に玆に之を紹介す

理科大學教授理學士
高等師範學校講師理學博士横山又次郎先生編

修正第四版

中等地文學

附地文學術語表

洋裝美本全一冊
定價金六十錢
郵稅金八錢

（文部省檢定濟）

横山理學博士の手に成れる地學に關しての教科書、數ある中に博士が尤も意を注ぎ力を用ひられたるは實に地文學の教科書なりとす然るに博士の熱心なる從來の著を以て足れりとせず尚進で之が改良校訂を企圖せられ、當局教員諸氏に迺ふ毎に其意見注文を叩き又深く自家の地文學講師として高等師範學校に於る多年の經驗を鑑み、久しく熟慮考案中の處其果遂に結晶して今回發兌の此中等地文學とはなれりされば其記事の難易の其中を得て汎く中學校師範學校の教科書として最適實なるは復喋々を要せざるなり大方の諸君子請ふ之を普通の廣告文視することなく本書を實地に運用して其の眞價値妙趣味のある所を知られんことを

本書出版以來(卅四年)府下各中學に於て教科用書として御採用の榮を荷ひし御校名は左の如し各地方に於ては其御校名を詳細に知るを得す發賣部數に依り推定せば凡四十餘校

いろは順

郁文館中學校○早稲田中學校○日本中學校○日本女子大學校○獨逸協會中學校○東京府第四中學校○東京眞宗中學校○開成中學校○大成學館中學校○京北中學校○京華中學校○錦城中學校等

理科大學教授兼高等師範學校講師理學博士
横山又次郎先生著

○續中等地文學

全一冊　近刊

理學博士　横山又次郎先生編

參考世界地誌

全一冊　近刊　千餘頁

本書は邦語世界地理の尤も精細なるものにして參考用書として遺憾なからんことを期せらる

地理學講義

理學士　山上萬次郎先生の最新の著述

全部六卷

第一卷　上下　日本の部	定價金七十六錢　郵税金八　錢	
第二卷　日本の部	同　金六十五錢　同　金八　錢	
第三卷　地文の部	同　金六十五錢　同　金六　錢	
第四卷　地文の部	近刊	
第五卷　外國の部	近刊	
第六卷　外國の部	近刊	

本書刊行の主眼は檢定受驗用及獨習用書として著述せられたるもの也

理學士　山上萬次郎先生校閲
鈴木鎌太郎先生著

○日本輪郭地圖

全九枚　正價金九錢　郵税金二錢

一、日本全圖　二、本州全圖　附北州及臺灣　三、本州東北部
四、本州東部　五、本州中部　畿内、伊勢灣、若狹灣及大阪灣　六、本州西部
七、九州　八、北州及千島　九、臺灣及南西諸島

○萬國輪郭地圖

全拾枚　正價金拾錢　郵税金二錢

一、世界全圖　二、アジア全圖　三、朝鮮及び遼東半島
四、支那本部　五、オセアニア第一、第二　六、ヨーロッパ全圖
七、ヨーロッパ中部　八、アフリカ全圖　九、北アメリカ全圖
一〇、南アメリカ全圖

高等師範學校教授東京外國語學校教授兼東京音樂學校講師
岡倉由三郎先生著

第二版 新撰日本文典 **文及び文の解剖**

和本全一冊　定價金廿七錢
頗美本　郵税四錢

本書は文法家として雷名高き岡倉先生が多年の苦心と經驗に依り中等教育を受くる者の爲に本邦語の結構を簡明に說かれたる者にして課を分ち節を定め一課毎に練習問題を附されたれば教科用書として極めて適切なるは勿論文法を學ぶ者の最も難しとせる文の解剖を新案の圖式を以て明瞭に解析せられたるが故に參考用書として一般學ぶ者の好侶伴たるを疑はず在來各種の文法書を用ゐんとする者は必ず本書に就きて本邦語の格式に通じ之を基礎として進むに於ては蓋し得る所大なるべし

言語學會雜誌の批評

今回出版されたのは、日本文典中、從來學者の深く意とめず、學生の困難を感ずる所の「文及び文の解剖」の部で所說といひ說き方といひ、さすが老練の著者として上手に出來てをる。加ふるにジュエル氏の解文圖式より思付かれた新案は尙ほ幾多改良の餘地を存するにもせよ、(一)文章の各部の關係を一目に認め得る事(二)原文を用ゐずして文章の格式を示し得る事、(三)二個以上の文の組織を畫圖に比較すると同じく、引き比べ得る事、等の長所があるから敎授者が廣く實地に應用してみたら、非常な便利を得るでだらうと思ふ。吾々は近時出た敎科的文典及び文章法を取扱つたものゝ中最も實用に適し最も簡明平易で、わかり易く、敎へ易い良書として、國語敎授者にすゝめるのである

高等師範學校兼外國語學校教授岡倉由三郎先生著

新撰日本文典 **働くことば**

全一冊　印刷中

發音學講話

文科大學講師文學士保科孝一先生著

全一冊　定價金五十錢
洋裝頗美本　郵税金八錢

國語教授法指針

新刊　全壹冊　定價金五拾錢
洋裝頗美本　郵税金六錢

言語學と聲音學の智識のない人が組織した國語教授法は必ず失敗に終ると言語學の泰斗スヰート氏がいわれた誠に至言である今後の國語教授法に幾多の刷新を謀るにわ必ず言語學と聲音學との上からまづ其の根本問題について深く研究しなければなりません

本書わ斯學に造詣深き保科文學士が以上の立脚點から今後の國語教授法について丁寧に解明せれらたもので國民教育に從事されて居る諸君わ必ず一讀の必要がありましよーと信じます

●苟くも國語を綴らむと欲する人の必要缺くべからざる寶典なり●

高橋龍雄先生著

訂正第四版

國語綴字法

洋裝美本全一冊　正價金二十二錢　郵稅金四錢

●本書は著者が多年の經驗によりて中學初年級の生徒に國語の假名文字の書きあらはし方など凡て讀書書取作文を最も正確に迅速に習得せしめむが爲めに作りたる者なり

●本書の特色は專ら實用的の語法の言語學的に之が語根を說明し器械的諳誦を排して智力的記憶に據らしめむとするにあり

●本書の有益なるはいかにして國語を書きあらはすべきかといへる一問題の系統の下に國字を以て外國語の綴字法の如く敎へむとするにあり

●本書は文章最も平易文字最も實用的にして中學生徒及び高等小學校生徒のみならず凡て一般社會の人に國字を以て文を草せんとするもの、必要缺くべからざるの寶典なり

文學士　藤岡勝二先生著

○國語學講演　全一冊　近刊

文學士　八杉貞利先生譯補

○外國語教授法　全一冊　近刊

文學士　新村出先生著

○言語學講義　全一冊　近刊

文學士　新村出　文學士　八杉貞利　兩先生合著

○聲音學初步　全一冊　近刊

言語學會々長文學博士上田萬年先生
同代表者文學士新村出先生
言語學會編纂

言語學雜誌

毎月十日發行　定價金十二錢　郵稅二錢

三木留三先生著

新刊

中等代數學

全二冊　洋裝美本上卷發行　定價金六十錢　郵稅金六錢

本書は著者が多年の經驗により幾多の時日を費し新式の敎授法に依り極めて親切に編纂せられたる者にして實地に就き數十回の敎授を試みられ初めて公けにするを許されたるものなり其內容に至りては喋々するを欲せず實地に運用せられ其虛ならざるを知られんことを

日本本地名辭書の著者
落後生吉田東伍先生著

二版

滋の歷史

全一冊　洋假裝美本定價金二十六錢　郵稅四錢

吉田先生夙に史家として名聲江湖に鳴る此頃流麗の筆機警の識を以て備さに本邦に於ける海の史的沿革を叙せらる蓋近來稀有の一大奇書なり海を歡て海に居り又海を想ひ海を知らんと欲せらるゝ諸君は請ふ一讀せよ

吉田東伍先生著

○陸の歷史　全一冊　近刊

文學士隈本繁吉先生著

○歷史研究及び敎授法　全一冊　近刊

瓜生喬先生著

第二版

江戸時代の武士

全一冊洋假裝頗美本　定價金四十錢　郵稅八錢

本書は江戸時代に於ける武士道の相與と變遷とを論じ兼て上下三百年間の風敎を叙し筆鋒委々時に當年闇黑界の情態を別發して備さに武士道の關係を尋繹論明せり故に本書の如きは一面に於ては江戸風俗史の要を兼備せりと謂ひつべき也初版は一ヶ月に滿ずして盡き今や第二版を發行なす陸續御購求の榮を賜らんとを

文部省普通學務局長
文學士澤柳政太郎先生著（第十一版）

訂正

讀書法

洋假裝美本全一冊　定價金貳拾錢　郵稅四錢

●●●●●●●書籍の効益は實に大なりと雖漫然雜讀するのみにては格別の利なし若し其効益を完ふせんとせば讀書の法則を知らざるべからず本書は心理學の大家「ベイン」故エール大學總長「ノア、ポルター」教授「リチアドソン」等諸學者の讀書法に關する著書を參考して著述せられたる者にして今日に最適切の良書なり學科の何たるを問はず苟も書籍を手にせらるゝ諸氏は先づ本書に就て讀書の法則を窺ひ而して後繙かるべし法則に從て讀むと之を知らずして讀むとは其効果必ず雲泥の差あらん本書は眞に學生必讀の良書也

文學士　塚原政治先生著

●感情の心理學

全一冊　近刊印刷中

著者は當分發表せず

教育學概論　全一冊　近刊

倫理學概論　全一冊　近刊

心理學概論　全一冊　近刊

田邊松坡編選

明十家詩選

●白紙中本唐仕立（十卷全五冊）　●毎冊●正價四十錢郵稅金四錢

本書は松坡先生が多年の苦心を以て明の劉青田高青邱季西涯李崆峒何太復徐廸功季滄溟王弇洲謝四溟陳子十大家の全書中の名篇佳作を編選せられたる者にして今劉高二家合卷一冊を發賣す斯道に志す士は必ず一本を備へざるべからず

文學士法學博士　天野爲之先生著

經濟學大意　全一冊　近刊

普通經濟原論　全一冊　近刊

經濟學論　全一冊　近刊

法學博士文學士
天野爲之先生著

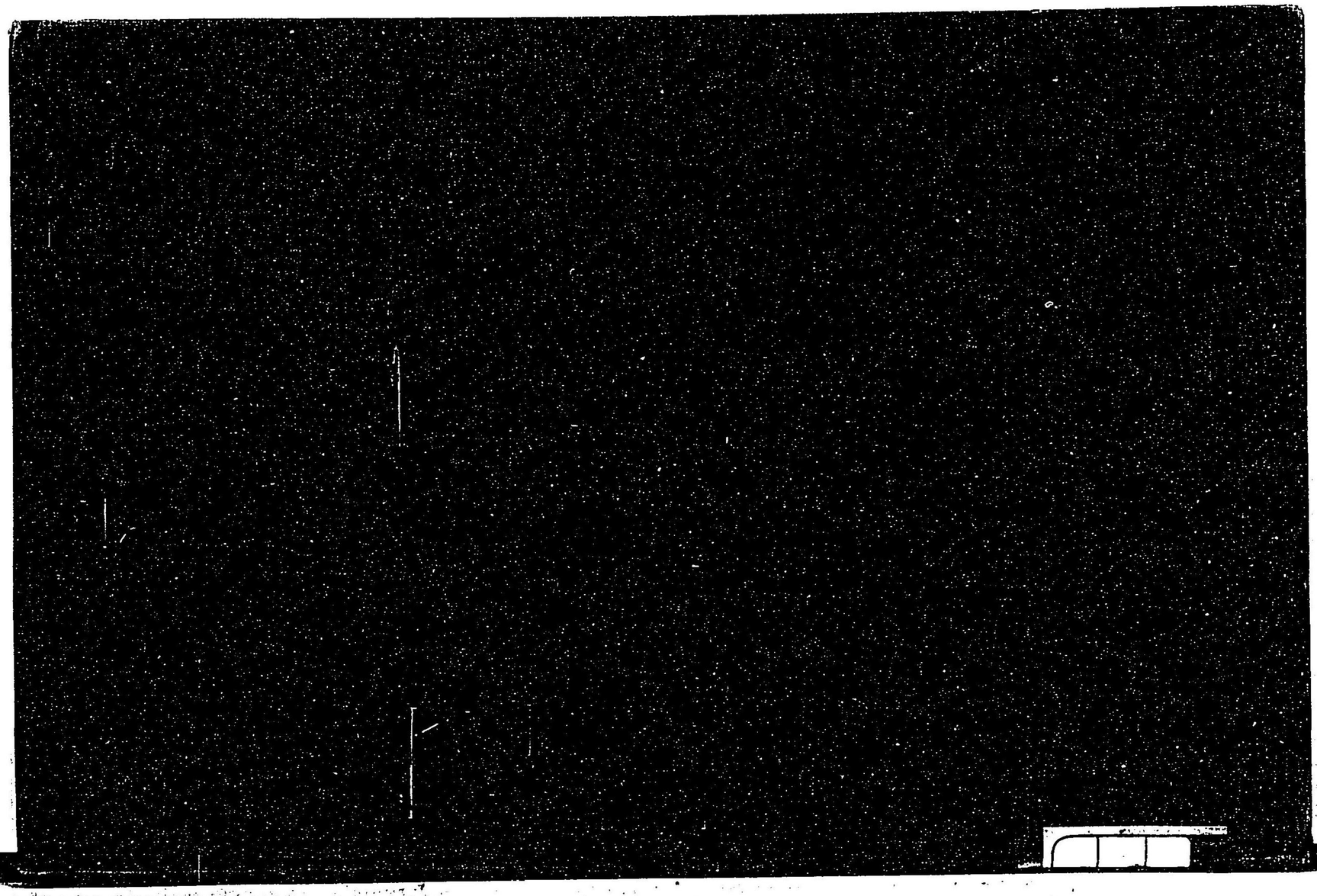
第五版

勤儉貯蓄新論

全一冊洋假裝美本　定價三十錢　郵稅六錢

今や投機奢侈の弊邦家を傾けんとす之を救ふの法唯だ勤儉貯蓄の奬勵にあり國家經濟の泰斗として雷名天下に聳く法學博士天野爲之先生夙に此を慨し即此著作あり此書や投機奢侈の害毒勤儉奬勵の必要及其方法等を極めて簡明に詳密に卓拔に論ぜられたる者將又理を推し數を抑へ古今を俯仰し東西を反顧し眞に堂々たる大文字なり世の實業家政治家及教育家は勿論苟も日本臣民たる者特に子弟教育の任に當らるゝ諸君は必ず一讀せざる可らざる寶典たることを疑はず

以上の外教科用書印刷着手中のもの數種有之候教科用書御撰定の節は一應御申越被下度希望仕候



807
Y592g

076599-000-7

807-Y592g

外国語教授法

八杉　貞利／著

M34. 12

DAA-0008